

平成 18 年 5 月の地震活動及び火山活動について

○ [地震活動]

震度 5 弱以上を観測した地震はありませんでした。

全国で震度 1 以上が観測された地震の回数は 109 回、日本及びその周辺における M 4 以上の地震の回数は 56 回でした。

国土地理院の GPS 観測結果では、東海地域及びその周辺における、プレート境界のゆっくり滑りに起因すると思われる長期的な地殻変動は、最近では停滞しているように見えます。

そのほか、日本国外ですが、5 月 27 日にインドネシアのジャワ島で M6.3 の地震が発生し、大きな被害を生じました。また、5 月 4 日にトンガ付近で M7.8 の地震が発生し、この地震による微弱な津波を父島と東北地方太平洋沿岸で観測しました。

震度 3 以上を観測するなどの主な地震活動の概況は別紙 1 のとおりです。また、世界の主な地震は別紙 2 のとおりです。

○ [火山活動]

噴火が観測されたのは、桜島及び諏訪之瀬島でした。

桜島では、1 日に爆発的噴火があったほか、小規模な噴火等が発生しました。また、期間外の 6 月 4 日から桜島南岳東側斜面の昭和火口付近で小規模な噴火が発生しています。

諏訪之瀬島では 13 日と 14 日に小規模な噴火が発生しました。

雌阿寒岳では、3 月 21 日の噴火以降活発であった噴煙活動に低下傾向が認められるものの依然活発な状態が続いています。特に山頂火口近傍及び北西側斜面では注意が必要です。

浅間山では、火山性地震および微動の発生回数ならびに火山ガスの放出量がやや多く、火山活動はやや活発な状態が続いており、山頂付近では注意が必要です。

三宅島では、二酸化硫黄を含む多量の火山ガスの放出は依然として続いており、火山活動はやや活発な状態が続いています。今後も火山ガスに対する警戒が必要です。

阿蘇山では、中岳第一火口の熱活動はやや活発な状態が続いています。火口付近では引き続き火山ガスに対する注意が必要です。

日本の主な火山活動の概況は別紙 3 のとおりです。また、世界の主な火山活動は別紙 4 のとおりです。

注 1：国土地理院の GPS による地殻変動観測については、国土地理院ホームページの記者発表資料「平成 18 年 4 月～平成 18 年 5 月の地殻変動について」を参照ください。

<http://www.gsi.go.jp/WNEW/PRESS-RELEASE/index.html>

注 2：気象庁の地震活動資料には、防災科学技術研究所や大学等関係機関のデータも使われています。

注 3：地震活動および火山活動の詳細については、地震・火山月報(防災編) 5 月号(6 月末頃に気象庁ホームページ掲載予定)をご覧ください。

注 4：平成 18 年 6 月の地震活動及び火山活動については、平成 18 年 7 月 10 日に発表の予定です。

2006 年 5 月の主な地震活動^{注 1)}

番号	月 日	時 分	震央地名	深さ (km)	M	最大 震度	備考 / コメント
1	5 月 1 日	16時00分	埼玉県北部	59	4.4	3	フィリピン海プレートの沈み込みに伴う地震
2	5 月 2 日	18時24分	伊豆半島東方沖	15	5.1	4	
3	5 月 12 日	1時09分	根室半島南東沖	56	5.0	3	太平洋プレートの沈み込みに伴う地震
4	5 月 15 日	1時42分	和歌山県北部	3	4.5	4	
5	5 月 20 日	13時57分	千葉県南部	74	4.7	3	太平洋プレートとフィリピン海プレートの境界付近で発生した地震
6	5 月 28 日	20時36分	伊予灘	80	4.3	3	フィリピン海プレートの沈み込みに伴う地震

注 1) 「主な地震活動」とは 陸域で M4.0 以上かつ震度 3 以上の地震、 海域で M5.0 以上かつ震度 3 の地震、
M6.0 以上の地震、 以前に取り上げた地震活動で、活動が継続しているもの。

その他の活動^{注 2)}

月 日	時 分	震央地名	深さ (km)	M	最大 震度	備考 / コメント
6 月 3 日	0時48分	福井県嶺南地方	7	4.1	3	

注 2) 「その他の活動」とは、注 1) の主な地震活動の基準に該当する地震で 2006 年 6 月中に発生したもの。

・地震防災対策強化地域判定会委員打合せ会検討結果

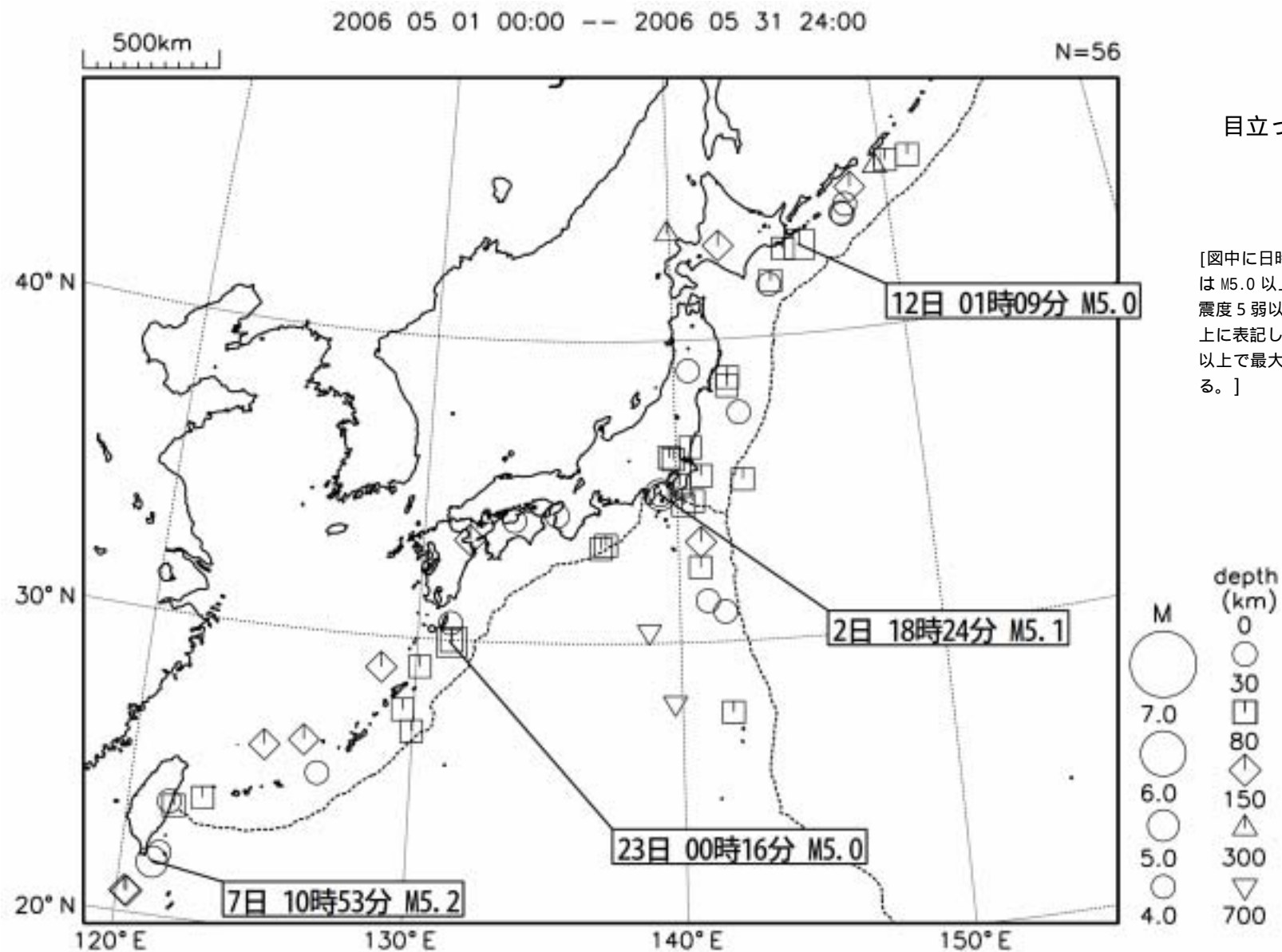
2006 年 5 月 29 日に気象庁において第 241 回地震防災対策強化地域判定会委員打合せ会（定例会）を開催し、気象庁は「最近の東海地域とその周辺の地震・地殻活動」として次のコメントを発表しました。その後も地震・地殻活動等の状況に変化はありません。

現在のところ、東海地震に直ちに結びつくような変化は観測されていません。

全般的には顕著な地震活動はありません。浜名湖東方から静岡県中部の直下では通常より活動レベルの低い状態が続いていますが、その他の地域では概ね平常レベルです。

東海地域及びその周辺における、プレート境界のゆっくり滑りに起因すると思われる長期的な地殻変動は、最近では停滞しているように見えます。

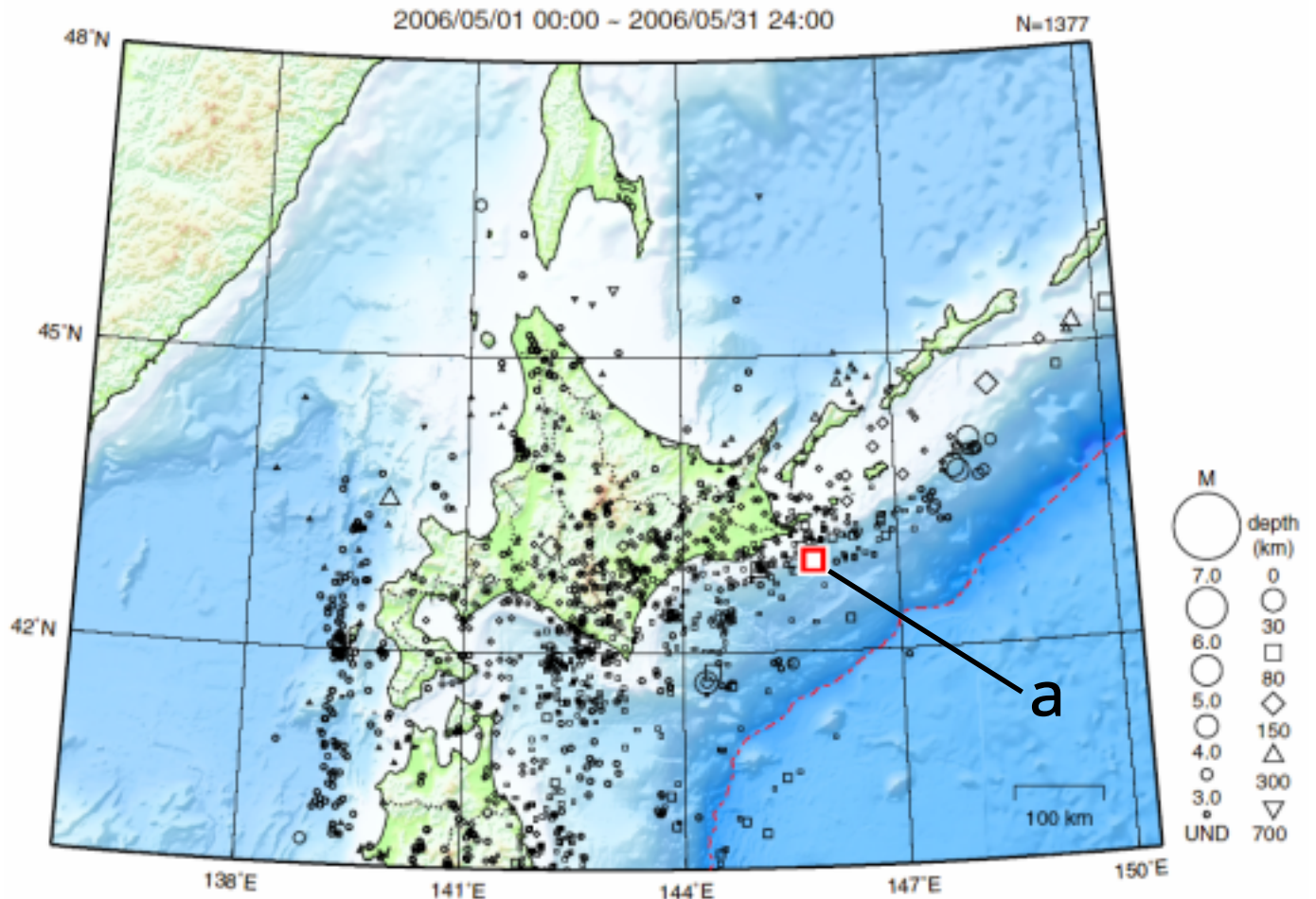
2006 年 5 月の全国地震活動（マグニチュード 4.0 以上）



目立った地震活動はなかった。

[図中に日時分、マグニチュードを付した地震は M5.0 以上の地震、または M4.0 以上で最大震度 5 弱以上を観測した地震である。また、上に表記した地震は M6.0 以上、または M4.0 以上で最大震度 5 弱以上を観測した地震である。]

北海道地方



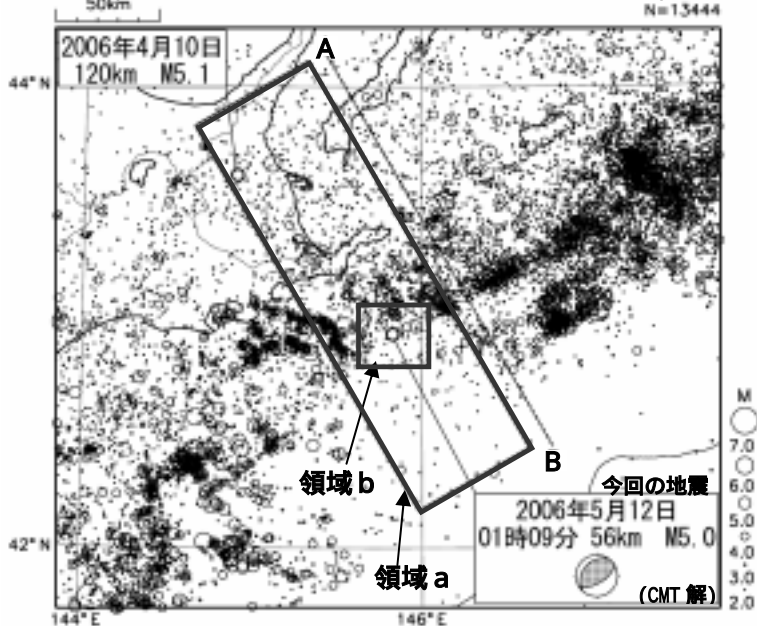
使用した地形データは日本海洋データセンターの J-EGG500、米国地質調査所の GTOP030、及び米国国立地球物理データセンターの ETOP02

a) 5月12日に根室半島南東沖で M5.0 (最大震度3) の地震があった。

[上述の地震はM6.0以上、陸域でM4.0以上かつ最大震度3以上、海域でM5.0以上かつ最大震度3以上のいずれかに該当する地震。]

5月12日 根室半島南東沖の地震

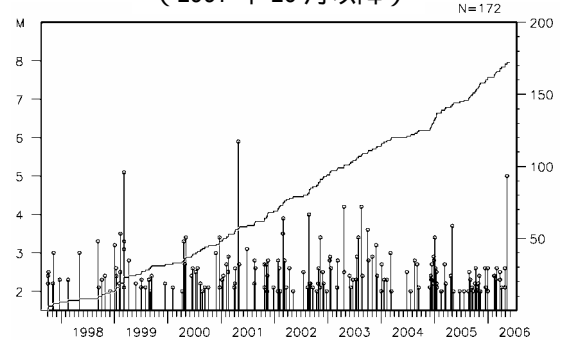
A 震央分布図
(1997年10月以降、深さ0~200 km、M 2.0)



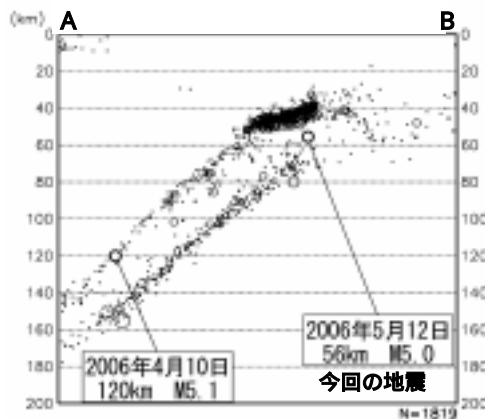
2006年5月12日01時09分に根室半島南東沖の深さ56kmでM5.0（最大震度3）の地震が発生した。発震機構（CMT解）は、北西-南東方向に圧力軸を持つ型で、太平洋プレートの沈み込みに伴い発生した地震である。

5月31日現在、余震は観測されていない（**A**）。

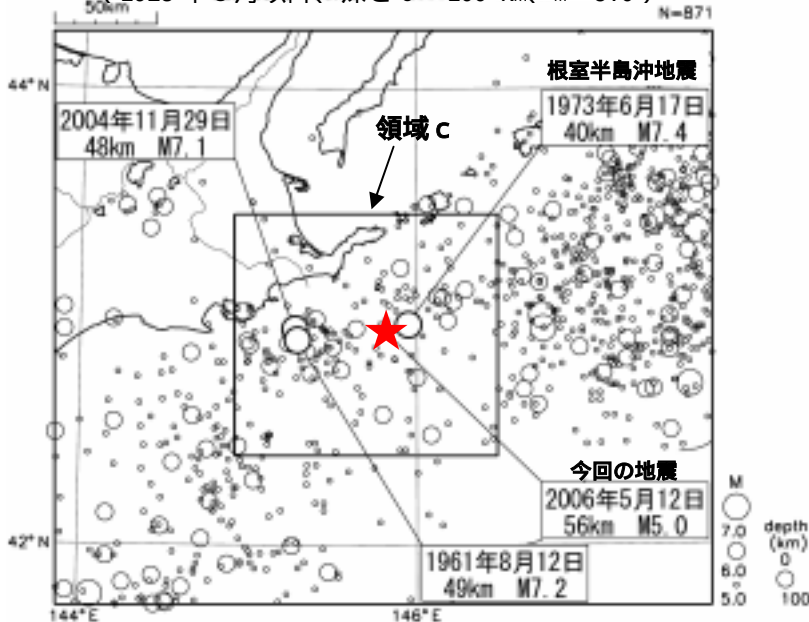
領域b内のM-T図と回数積算図
(1997年10月以降)



領域a内の断面図 (A-B投影)

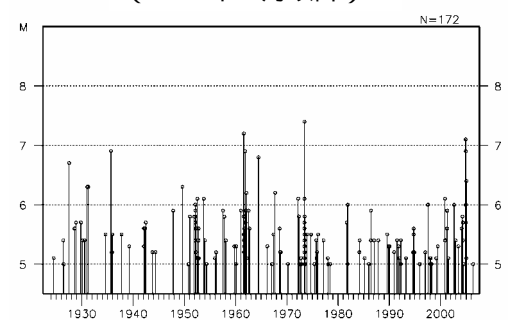


B 震央分布図
(1923年8月以降、深さ0~100 km、M 5.0)

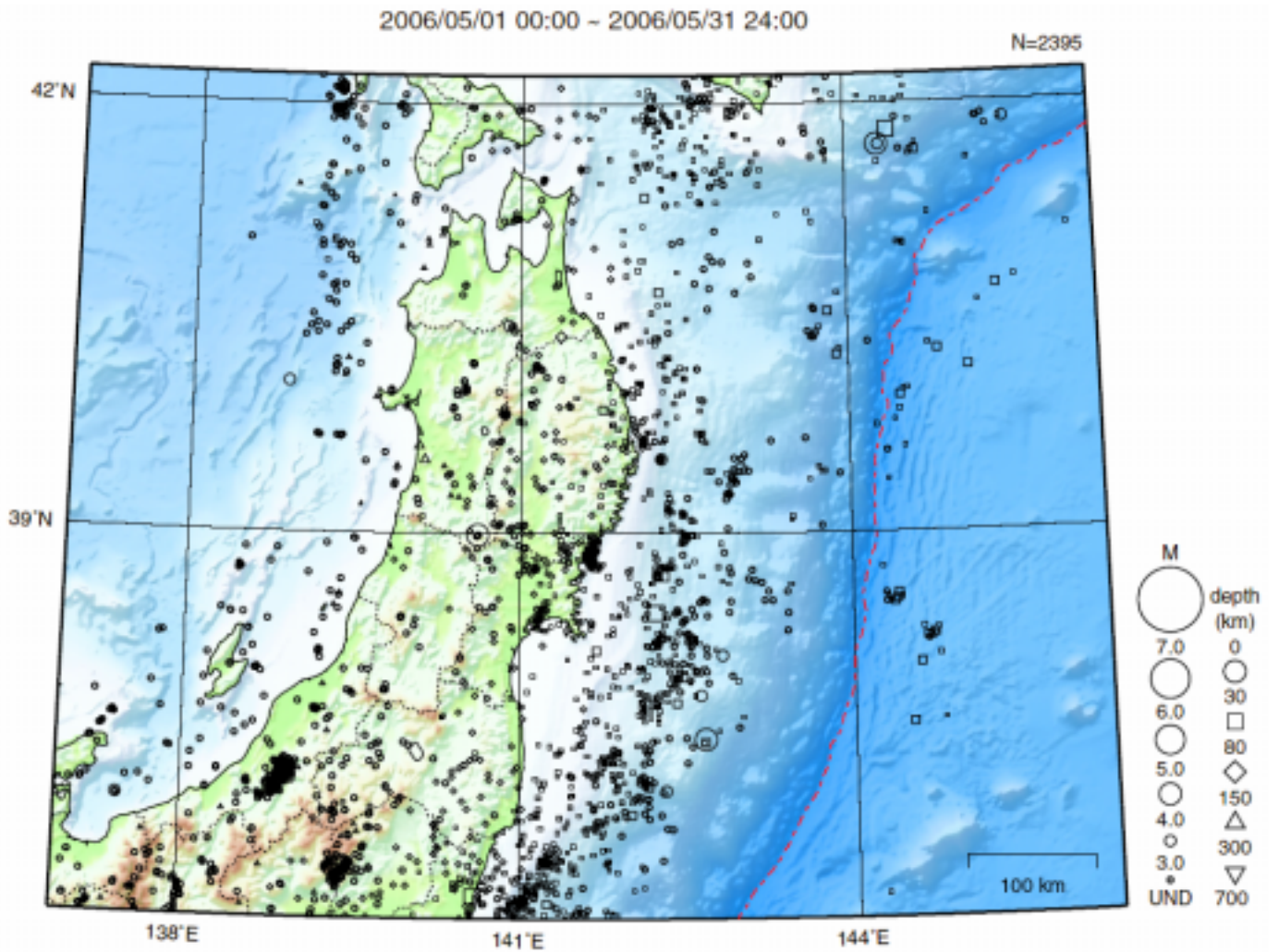


1923年8月以降の活動を見ると、この付近では、「1973年6月17日根室半島沖地震」(M7.4、最大震度5)が発生している。また今回の地震の西約50km付近では、2004年11月29日にM7.1の地震（最大震度5強）が発生するなど、M7程度の地震が時々発生している（**B**）。

領域c内のM-T図
(1923年8月以降)



東北地方

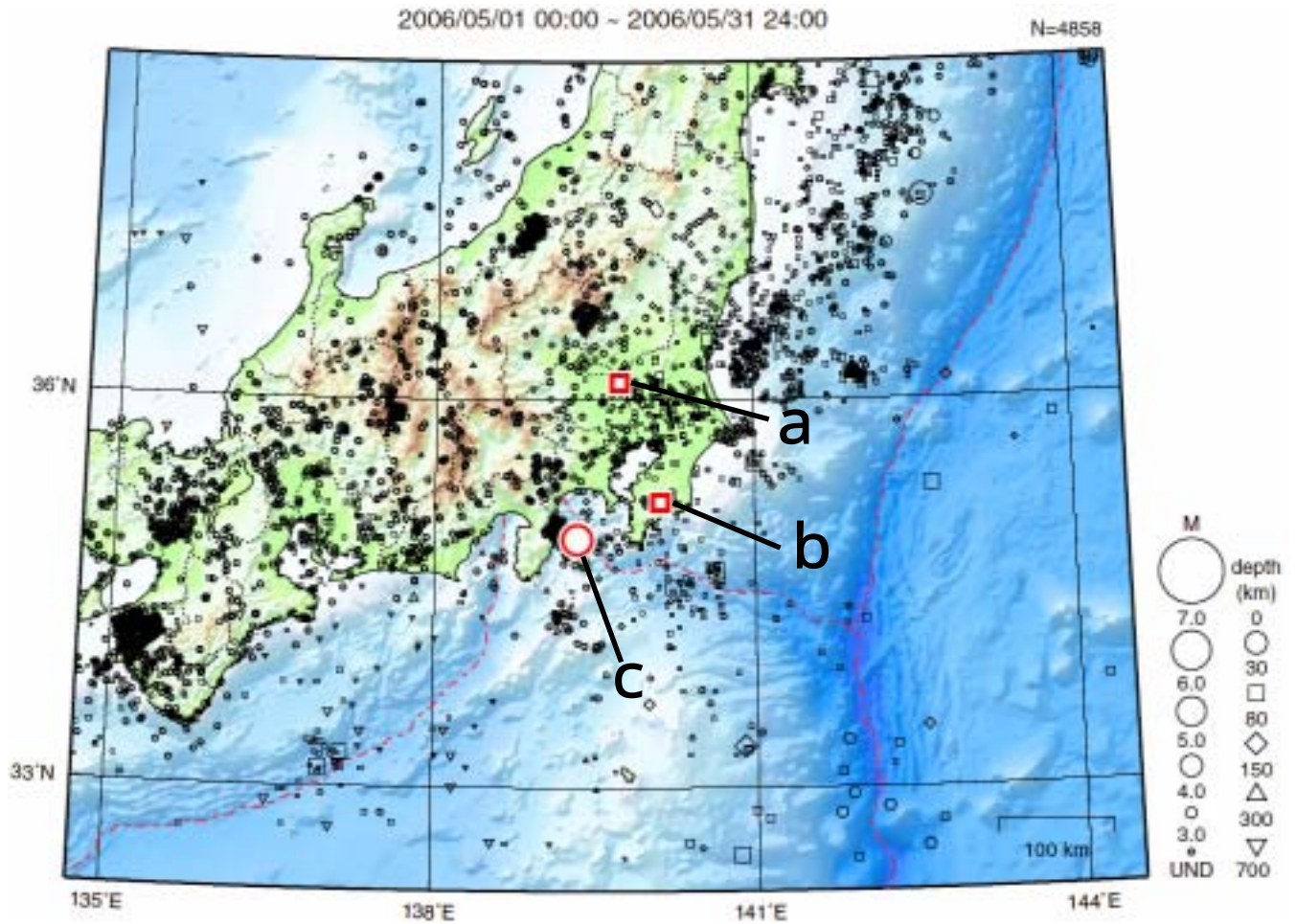


使用した地形データは日本海洋データセンターの J-EGG500、米国地質調査所の GTOP030、及び米国国立地球物理データセンターの ETOP02

特に目立った活動はなかった。

[上述の地震はM6.0 以上、陸域でM4.0 以上かつ最大震度 3 以上、海域でM5.0 以上かつ最大震度 3 以上のいずれかに該当する地震。]

関東・中部地方



使用した地形データは日本海洋データセンターの J-EGG500、米国地質調査所の GTOP030、及び米国国立地球物理データセンターの ETOP02

- a) 5月1日に茨城・埼玉県境付近〔埼玉県北部〕で M4.4 (最大震度3) の地震があった。
- b) 5月20日に千葉県南部で M4.7 (最大震度3) の地震があった。
- c) 4月17日から伊豆半島東方沖で続いていた地震活動は、5月に入ってから
も継続し、5月2日には M5.1 (最大震度4) の地震が発生した。

(上記期間外)

6月3日に福井県嶺南地方で M4.1 (最大震度3) の地震があった。

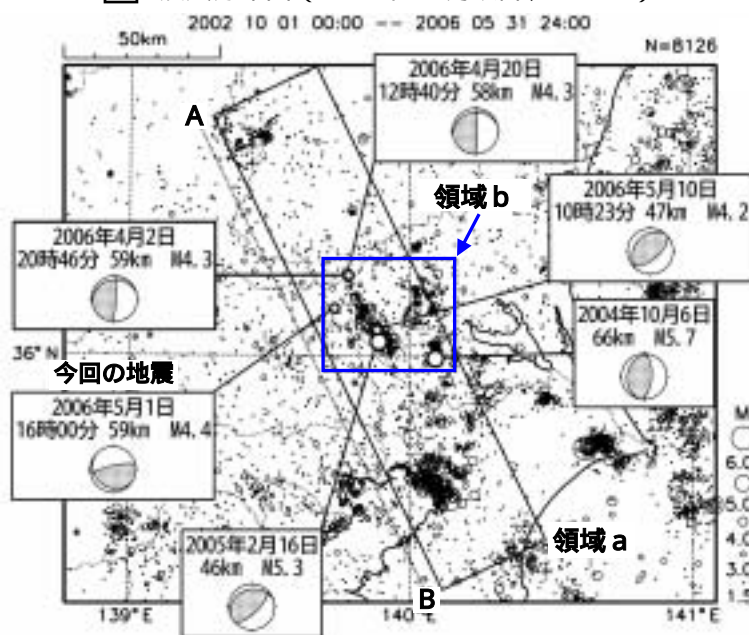
[]内は気象庁が情報発表に用いた震央地域名

[上述の地震はM6.0以上、陸域でM4.0以上かつ最大震度3以上、海域でM5.0以上かつ最大震度3以上のいずれかに該当する地震。]

5月1日 茨城・埼玉県境付近〔埼玉県北部〕の地震

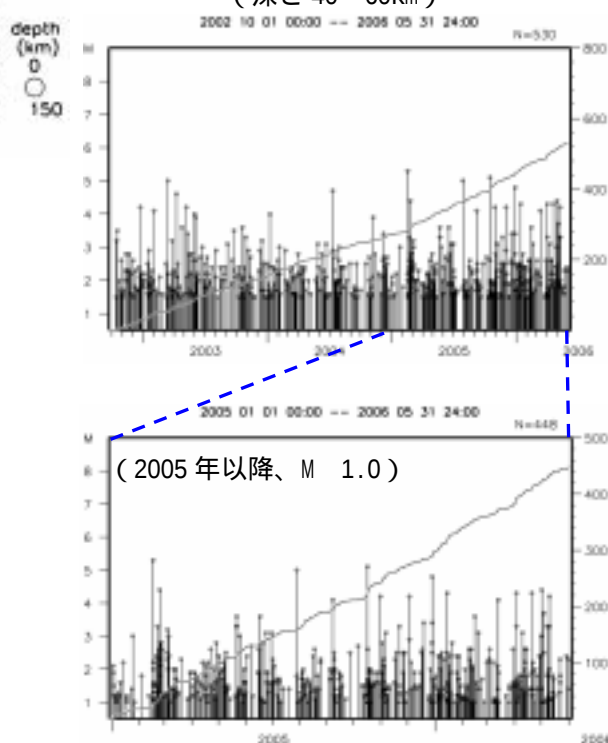
〔 〕内は気象庁が情報発表に用いた震央地域名

〔A〕 震央分布図（2002年10月以降、M 1.5）

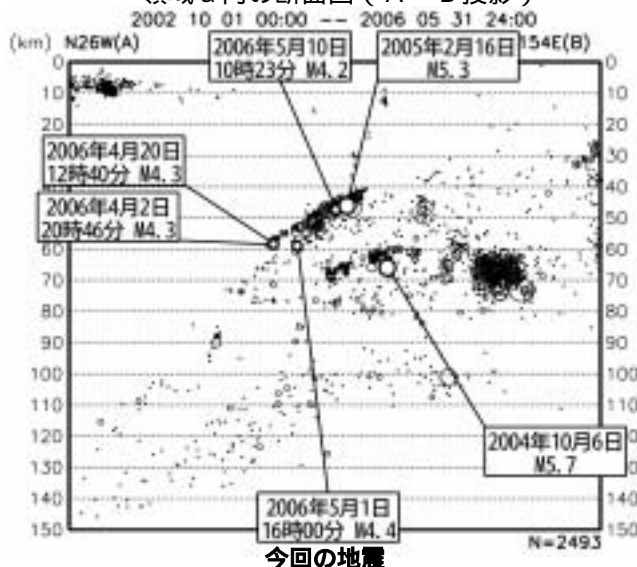


2006年5月1日16時00分に茨城・埼玉県境付近〔埼玉県北部〕の深さ59kmでM4.4（最大震度3）の地震が発生した。発震機構は南北方向に圧力軸を持つ逆断層型であり、フィリピン海プレートの沈み込みに伴う地震である。付近には地震活動の活発な領域があり、M4.0以上の地震が度々発生しているが、今回の地震はそれらの地震群からやや西に離れた場所で発生した。（〔A〕）

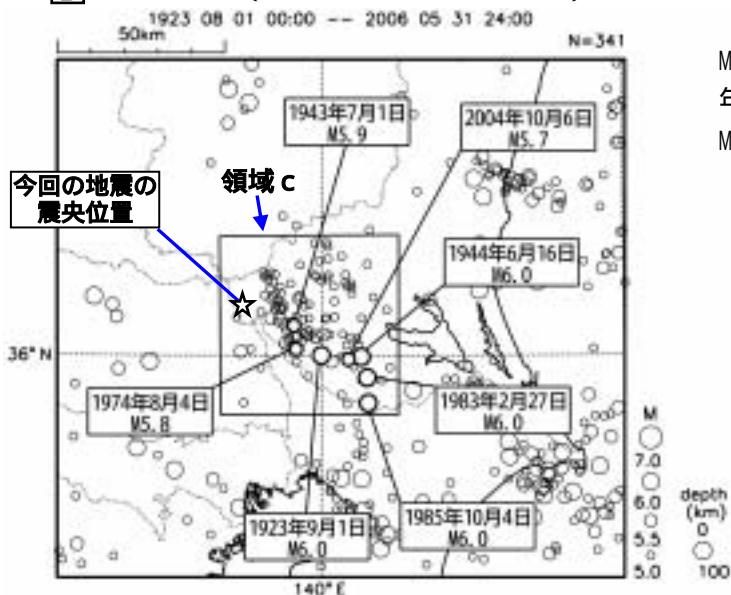
領域b内の地震活動経過図、回数積算図（深さ40～60km）



領域a内の断面図（A - B投影）

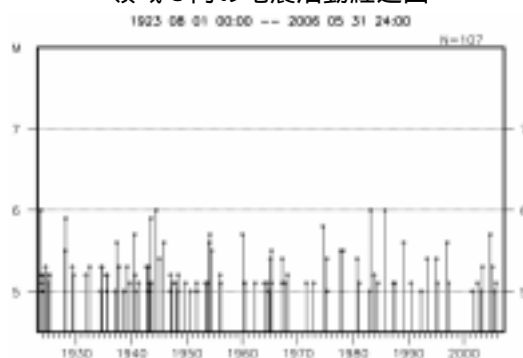


〔B〕 震央分布図（1923年8月以降、M 5.0）



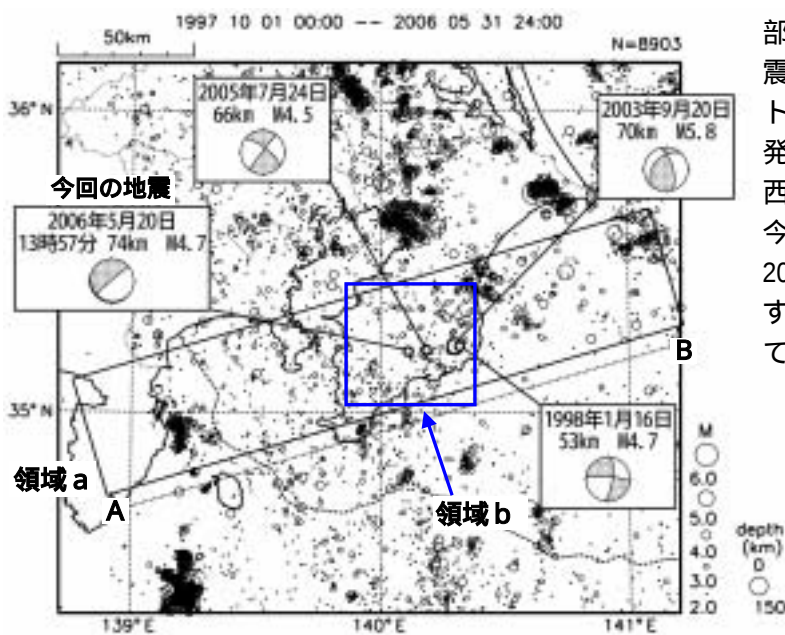
1923年8月以降、今回の地震の震央付近ではM6.0以上の地震が4回発生しているが、1985年10月4日のM6.0（最大震度5）の地震以降、M6.0以上の地震は発生していない。（〔B〕）

領域c内の地震活動経過図



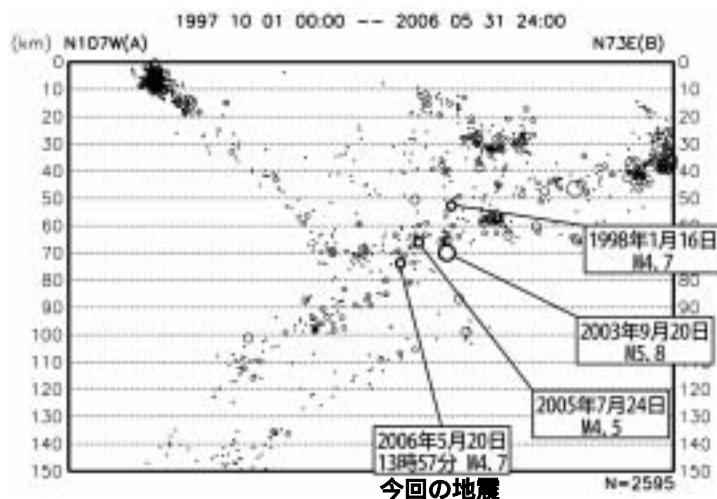
5月20日 千葉県南部の地震

A 震央分布図（1997年10月以降、M 2.0）

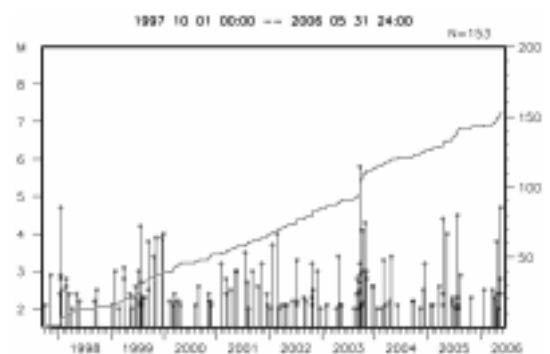


2006年5月20日13時57分に千葉県南部の深さ74kmでM4.7（最大震度3）の地震が発生した。この地震は、太平洋プレートとフィリピン海プレートの境界付近で発生した地震と考えられる。発震機構は北西-南東方向に圧力軸を持つ型であった。今回の地震の震源付近では、2003年9月20日にM5.8（最大震度4）の地震が発生するなど、M5.0前後の地震が時々発生している。（**A**）

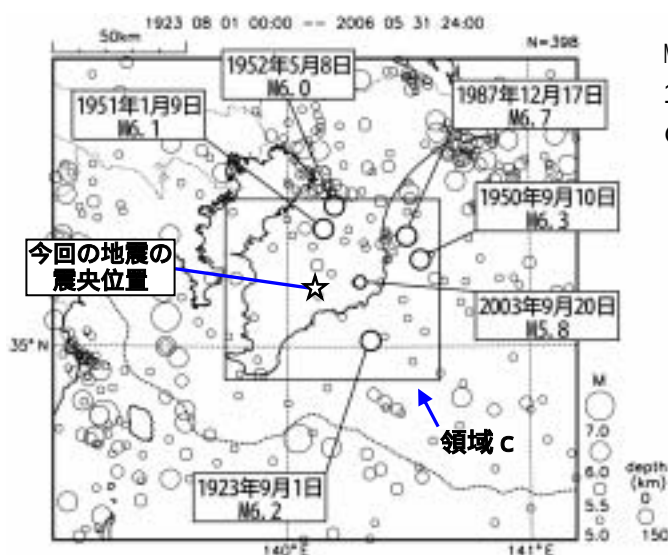
領域a内の断面図（A-B投影）



領域b内の地震活動経過図、回数積算図（深さ50～90km）

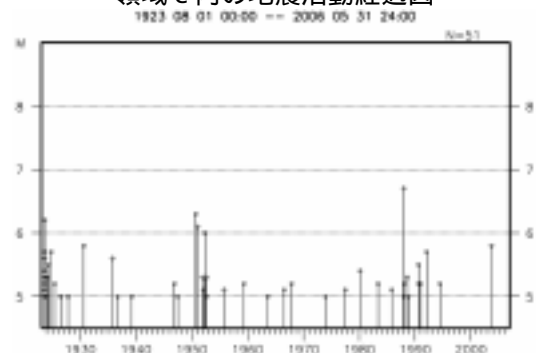


B 震央分布図（1923年8月以降、M 5.0）



1923年8月以降、今回の地震の震央付近ではM6.0以上の地震が6回発生している。最大は1987年12月17日のM6.7の地震（最大震度5）の地震である。（**B**）

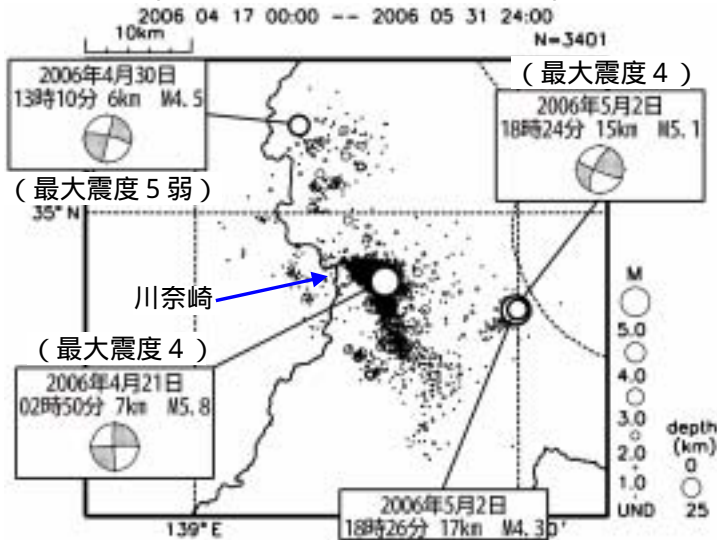
領域c内の地震活動経過図



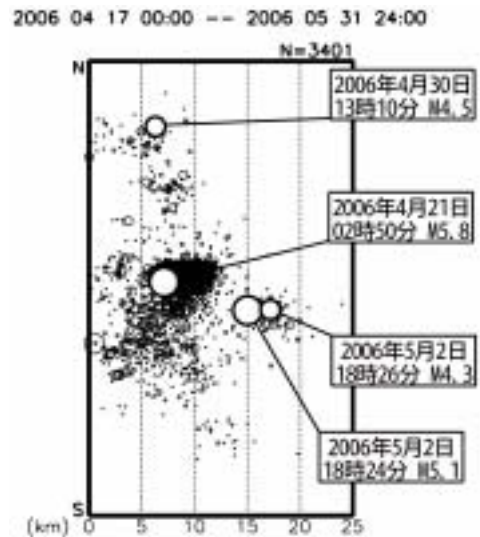
伊豆半島東方沖の地震活動

2006年4月17日から伊豆半島東方沖で活発となった地震活動は、5月2日にこれまでの活動域から東に10kmほど離れた場所でM5.1（最大震度4）とM4.3（M5.1の地震の余震、最大震度2）の地震が発生したものの、その後M3.0以上の地震は発生しておらず、地震活動は低調となってきている。

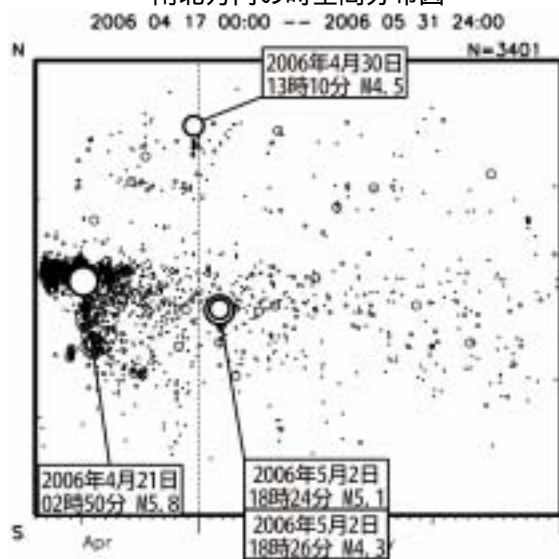
震央分布図
(2006年4月17日以降、Mすべて)



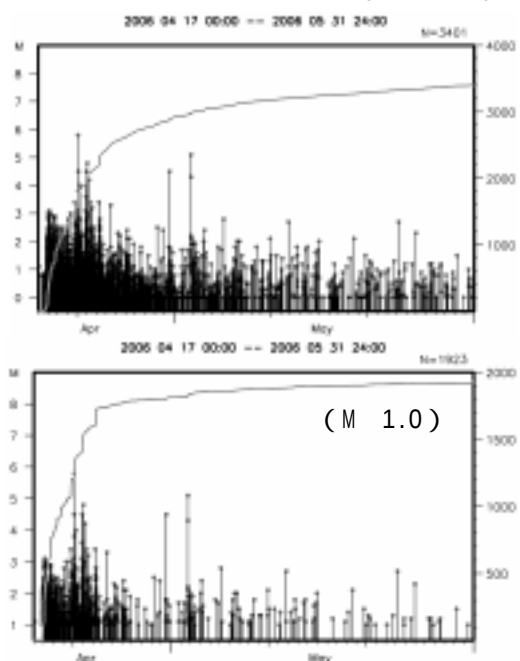
南北断面図



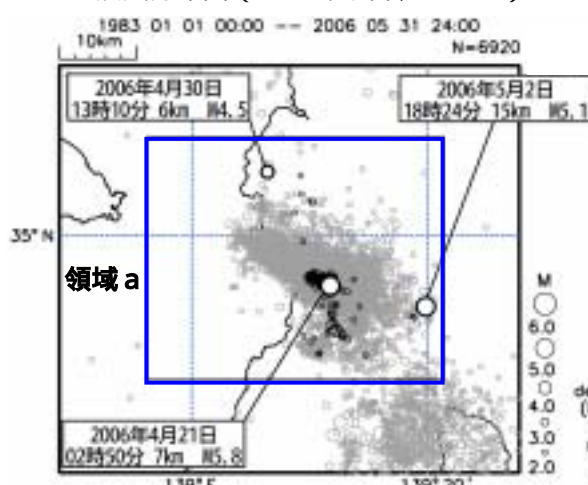
南北方向の時空間分布図



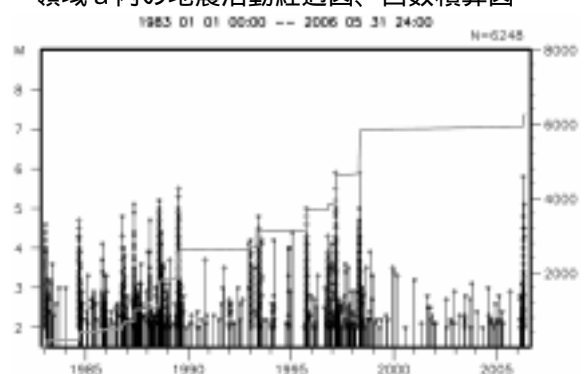
地震活動経過図、回数積算図 (Mすべて)



震央分布図 (1983年以降、M 2.0)



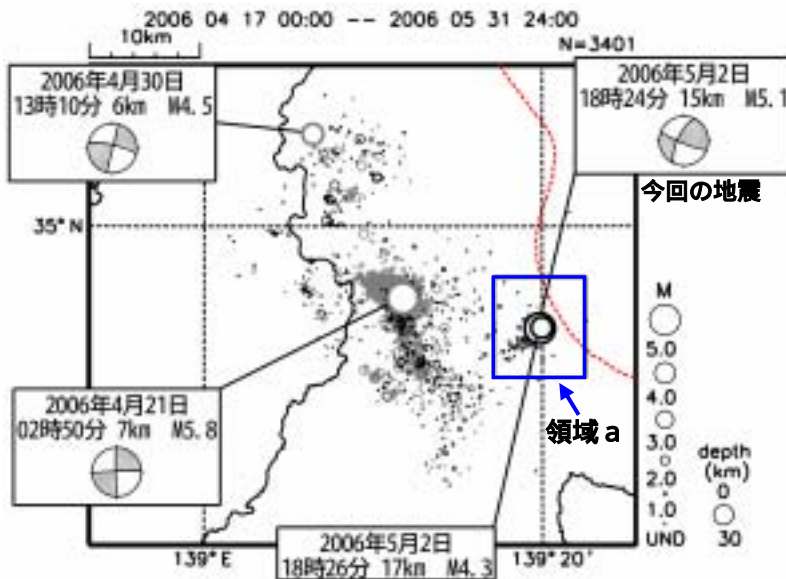
領域a内の地震活動経過図、回数積算図



(2006年4月17日以降の活動を濃く表示)

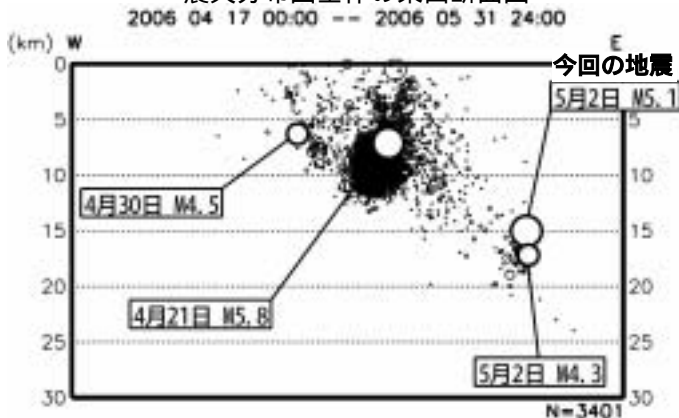
5月2日 伊豆半島東方沖の地震

A 震央分布図(2006年4月17日以降、Mすべて)

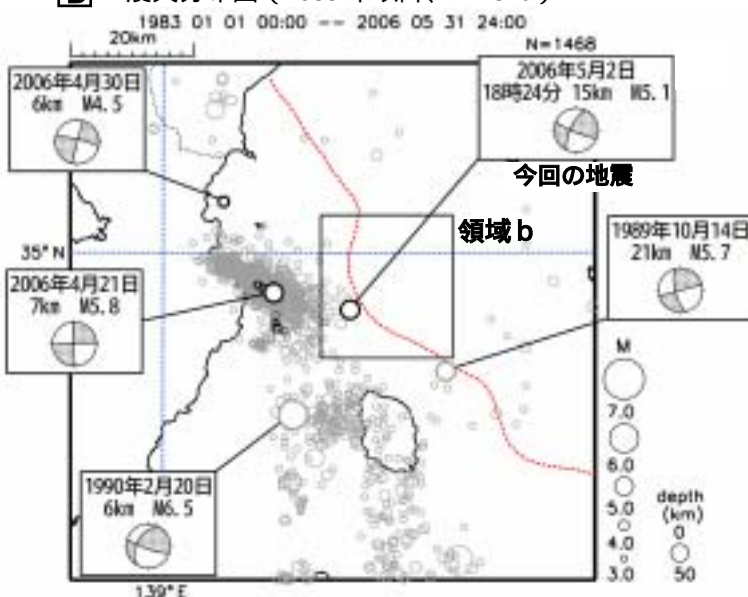


(2006年5月以降の地震を濃く表示している)

震央分布図全体の東西断面図



B 震央分布図(1983年以降、M 3.0)

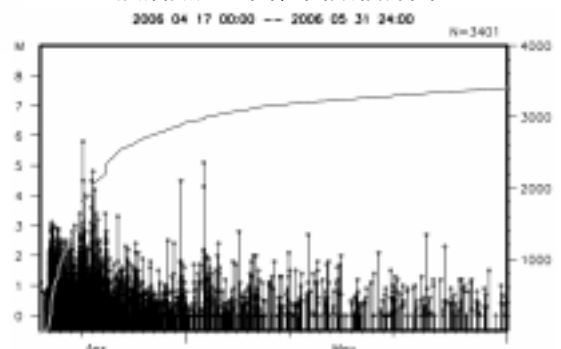


(2006年4月17日以降の地震を濃く表示している)

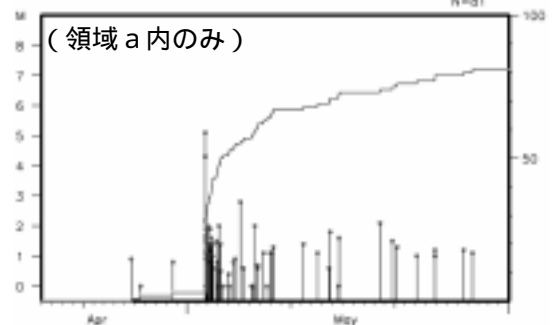
2006年5月2日18時24分に伊豆半島東方沖の深さ15kmでM5.1(最大震度4)の地震が発生した。発震機構は、北北西-南南東方向に圧力軸を持つ横ずれ断層型であった。直後の18時26分にはこの地震の余震となるM4.3(最大震度2)の地震が発生したが、余震活動は減衰してきている。

伊豆半島東方沖では、2006年4月17日より地震が多発し、4月21日にはM5.8(最大震度4)の地震が発生したが、地震活動は低調となってきている。今回の地震はそれらの活動域から東に約10km離れた場所で発生した。(A)

地震活動経過図、回数積算図

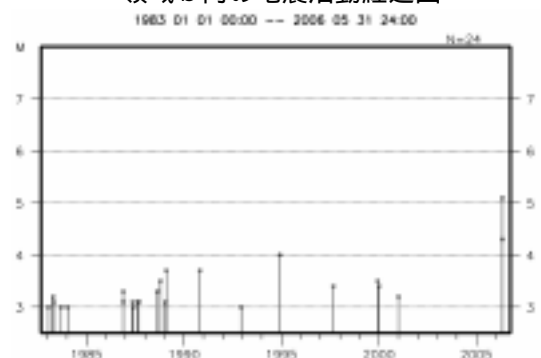


(領域a内のみ)

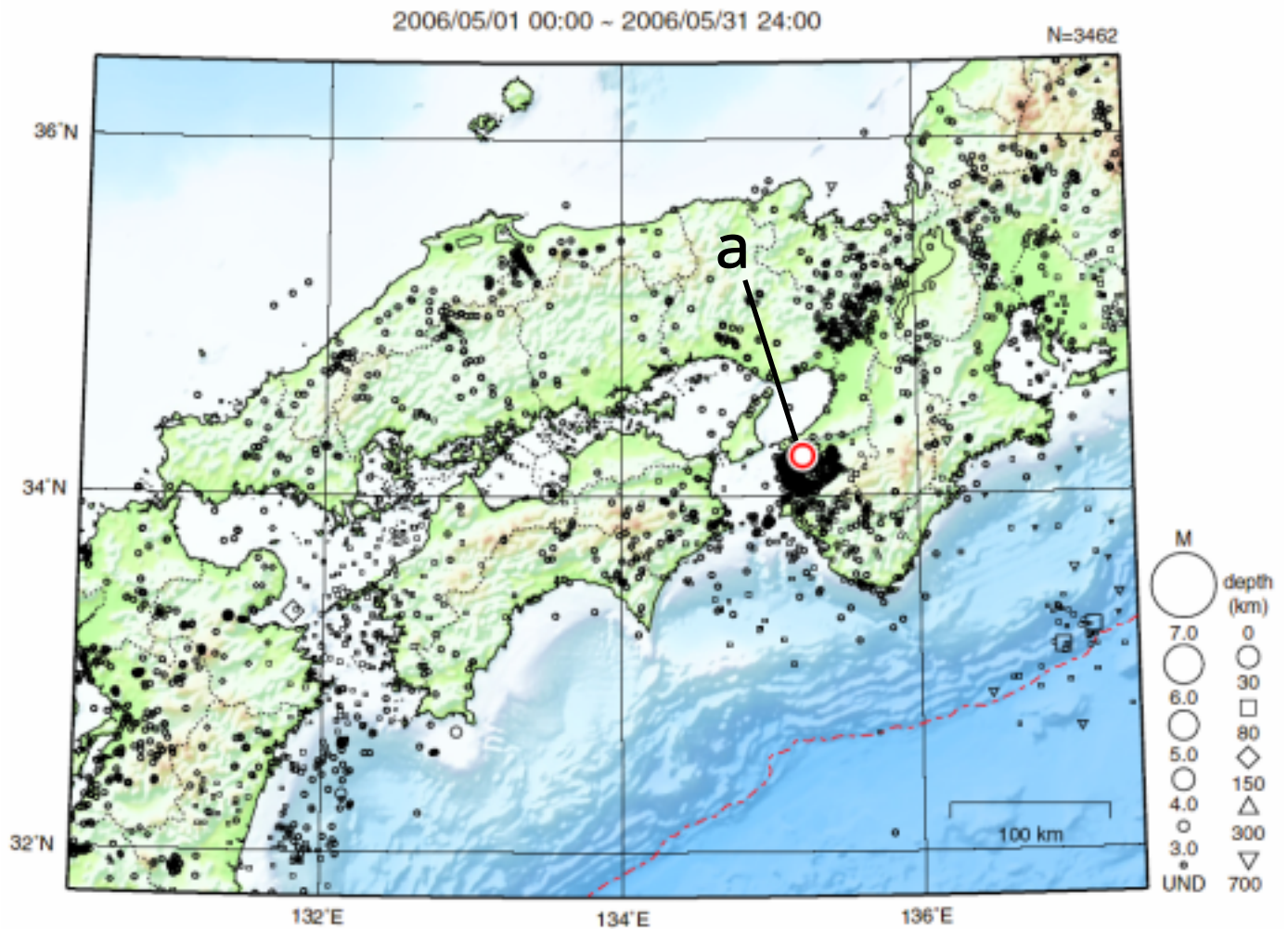


1983年以降の活動を見ると、今回の地震の震央は、伊豆半島東方沖の主な地震活動域からは東に外れた場所であり、付近ではM5.0クラスの地震は珍しい。(B)

領域b内の地震活動経過図



近畿・中国・四国地方



使用した地形データは日本海洋データセンターの J-EGG500、米国地質調査所の GTOPO30、及び米国国立地球物理データセンターの ETOP02

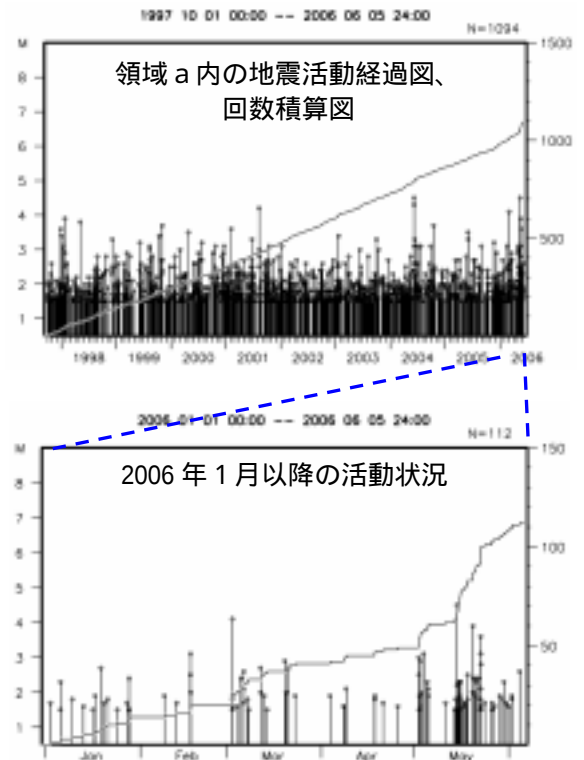
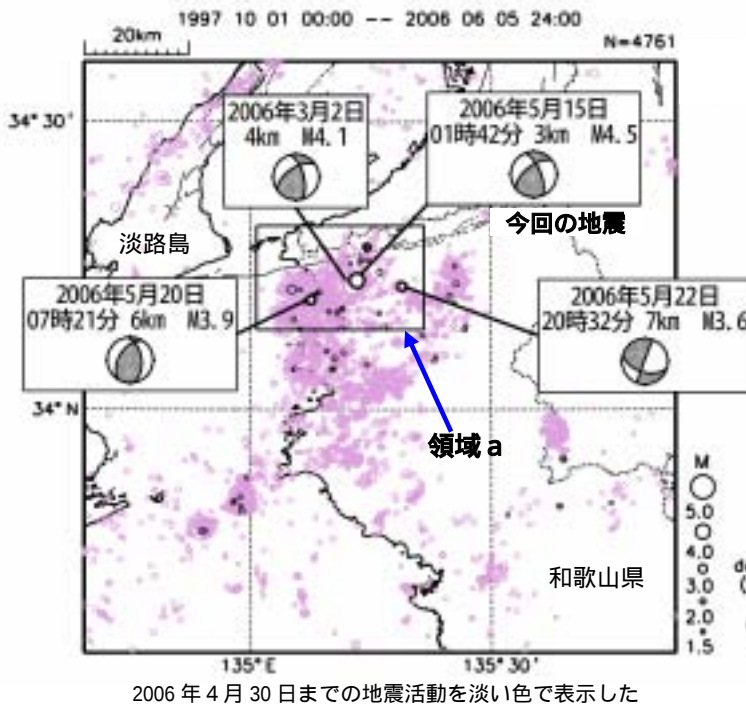
a) 5月15日に和歌山県北部で M4.5 (最大震度4) の地震があった。

[上述の地震はM6.0以上、陸域でM4.0以上かつ最大震度3以上、海域でM5.0以上かつ最大震度3以上のいずれかに該当する地震。]

5月15日 和歌山県北部の地震

A

震央分布図（1997年10月以降、M 1.5）

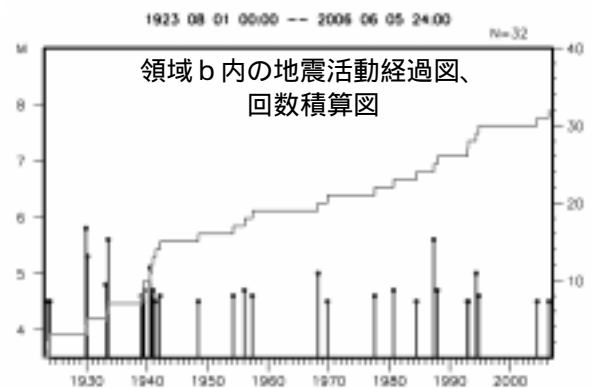
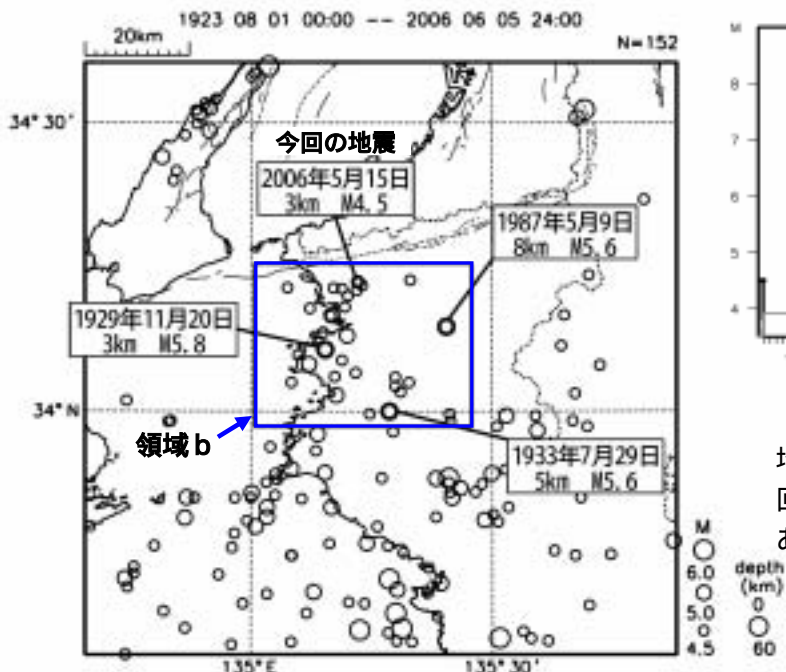


2006年5月15日01時42分に和歌山県北部の深さ3kmでM4.5（最大震度4）の地震が発生した。この地震の発震機構は西北西-東南東方向に圧力軸を持つ型でこの付近でよく見られるタイプである。

和歌山県北部にはほぼ定常的な地震活動域があるが、今回の地震が発生した北側の領域では5月中やや活発に推移した。震度1以上を観測した地震は5月中に19回発生し、20日07時21分の地震（M3.9、深さ6km）では最大震度3、22日20時32分の地震（M3.6、深さ7km）では最大震度2を観測している。一連の活動は6月に入ってほぼ収まっている。（**A**）

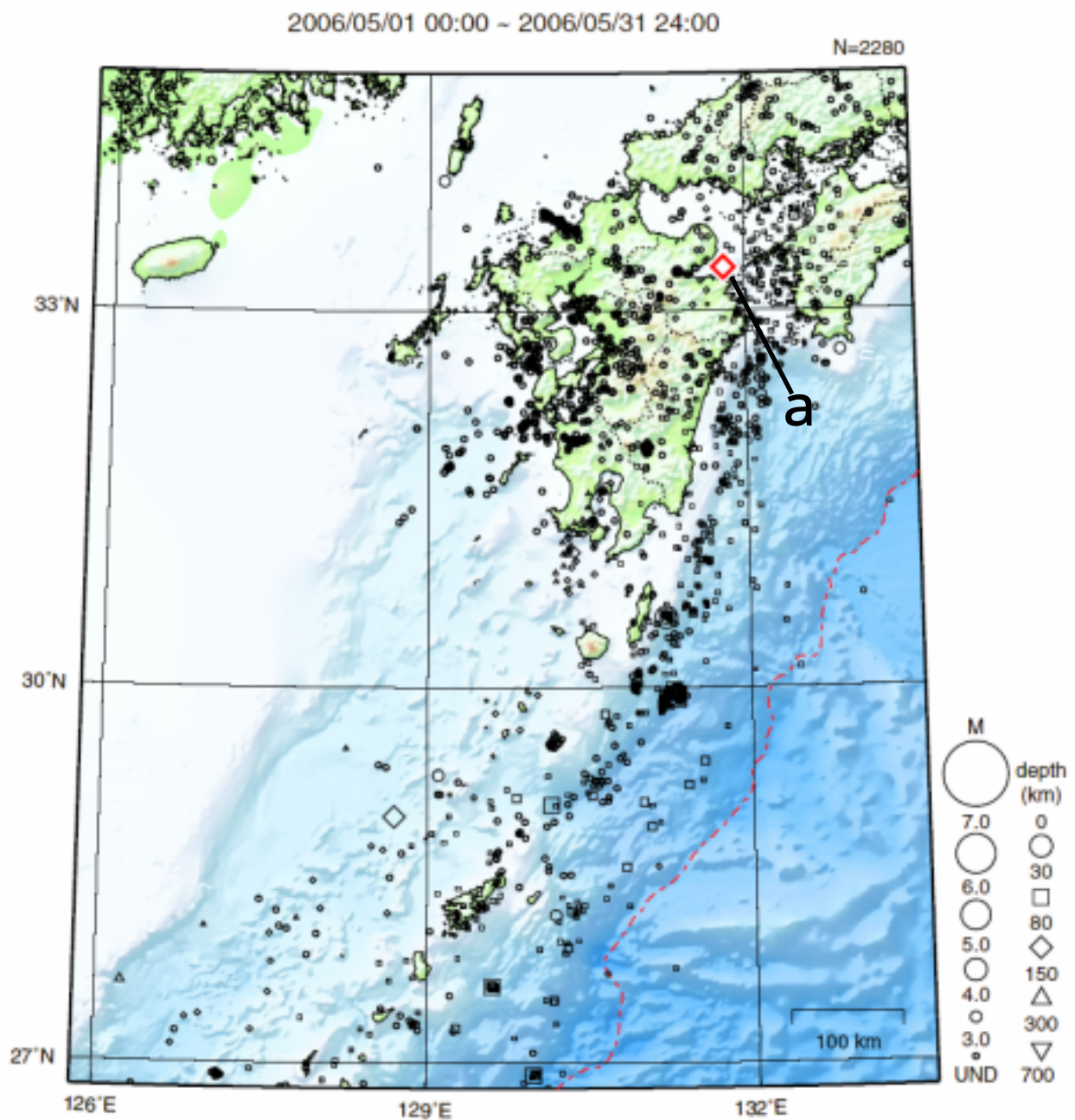
B

震央分布図（1923年8月以降、M 4.5）



1923年8月以降の活動をみると、今回の地震の震央付近では、M5.0以上の地震が7回観測されているが、いずれもM6.0未満である。（**B**）

九州地方



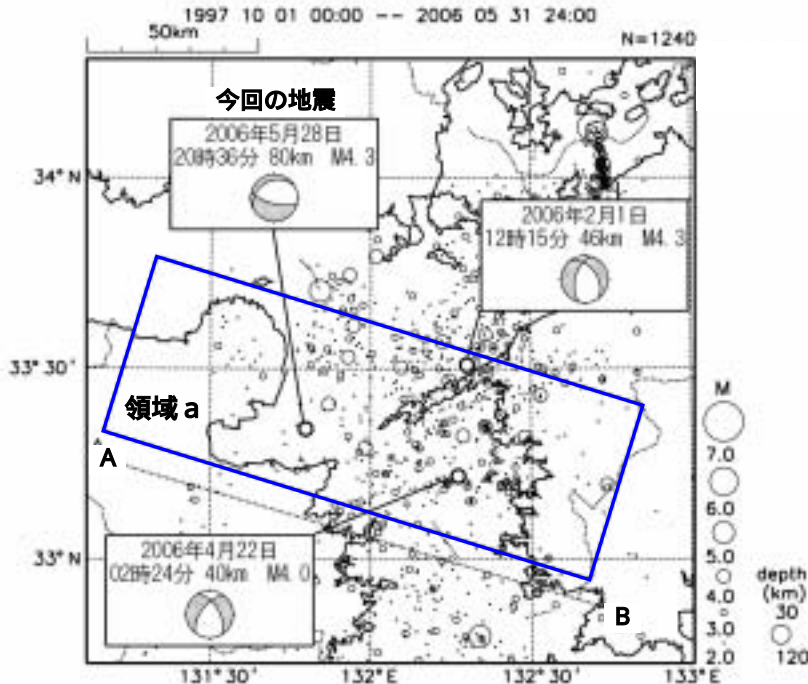
使用した地形データは日本海洋データセンターの J-EGG500、米国地質調査所の GTOP030、及び米国国立地球物理データセンターの ETOP02

a) 5 月 28 日に伊予灘で M4.3 (最大震度 3) の地震があった。

[上述の地震は M6.0 以上、陸域で M4.0 以上かつ最大震度 3 以上、海域で M5.0 以上かつ最大震度 3 以上のいずれかに該当する地震。]

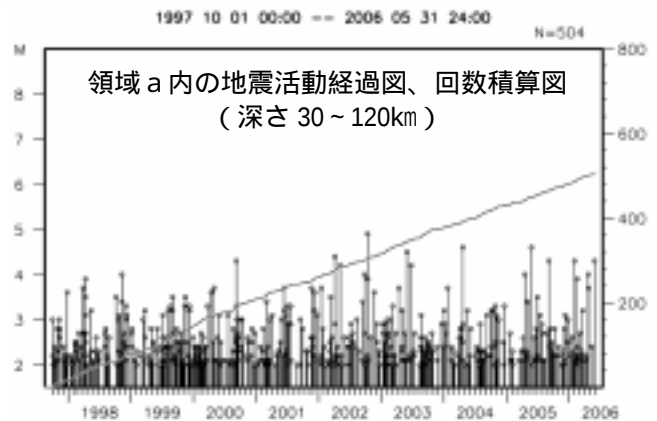
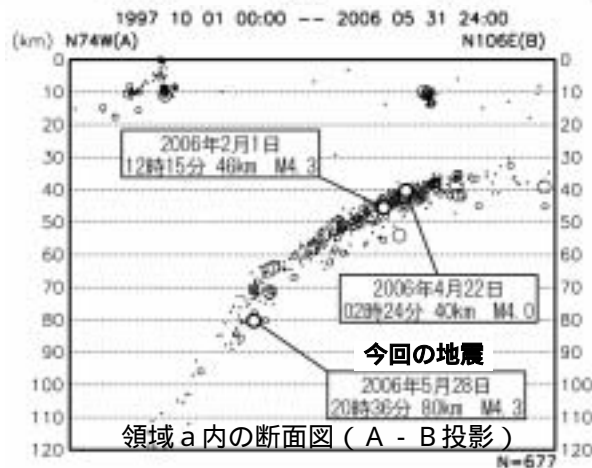
5月28日 伊予灘の地震

[A] 震央分布図（1997年10月以降、M 2.0、深さ30～120km）



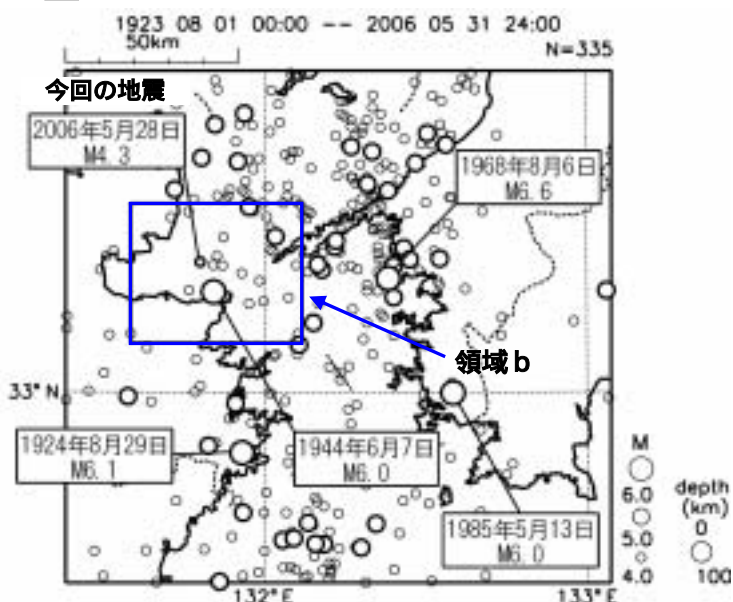
2006年5月28日20時36分に伊予灘の深さ80kmでM4.3（最大震度3）の地震が発生した。発震機構は南北方向に張力軸を持つ型である。余震は観測されていない。

今回の地震の震源付近では、ほぼ定期的に地震活動があり、M4～5程度の地震が時々発生している。最近では2006年2月1日に深さ46kmでM4.3（最大震度3）、2006年4月22日に深さ40kmでM4.0（最大震度3）の地震が発生している。いずれも沈み込むフィリピン海プレートの内部で発生した地震である。（[A]）

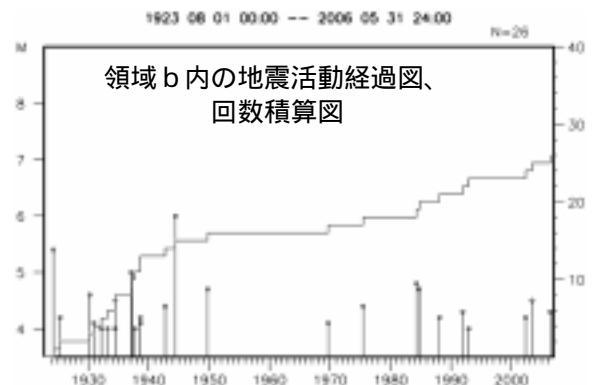


2006年1月以降のM4.0以上の地震に吹き出しを付けた

[B] 震央分布図（1923年8月以降、M 4.0）

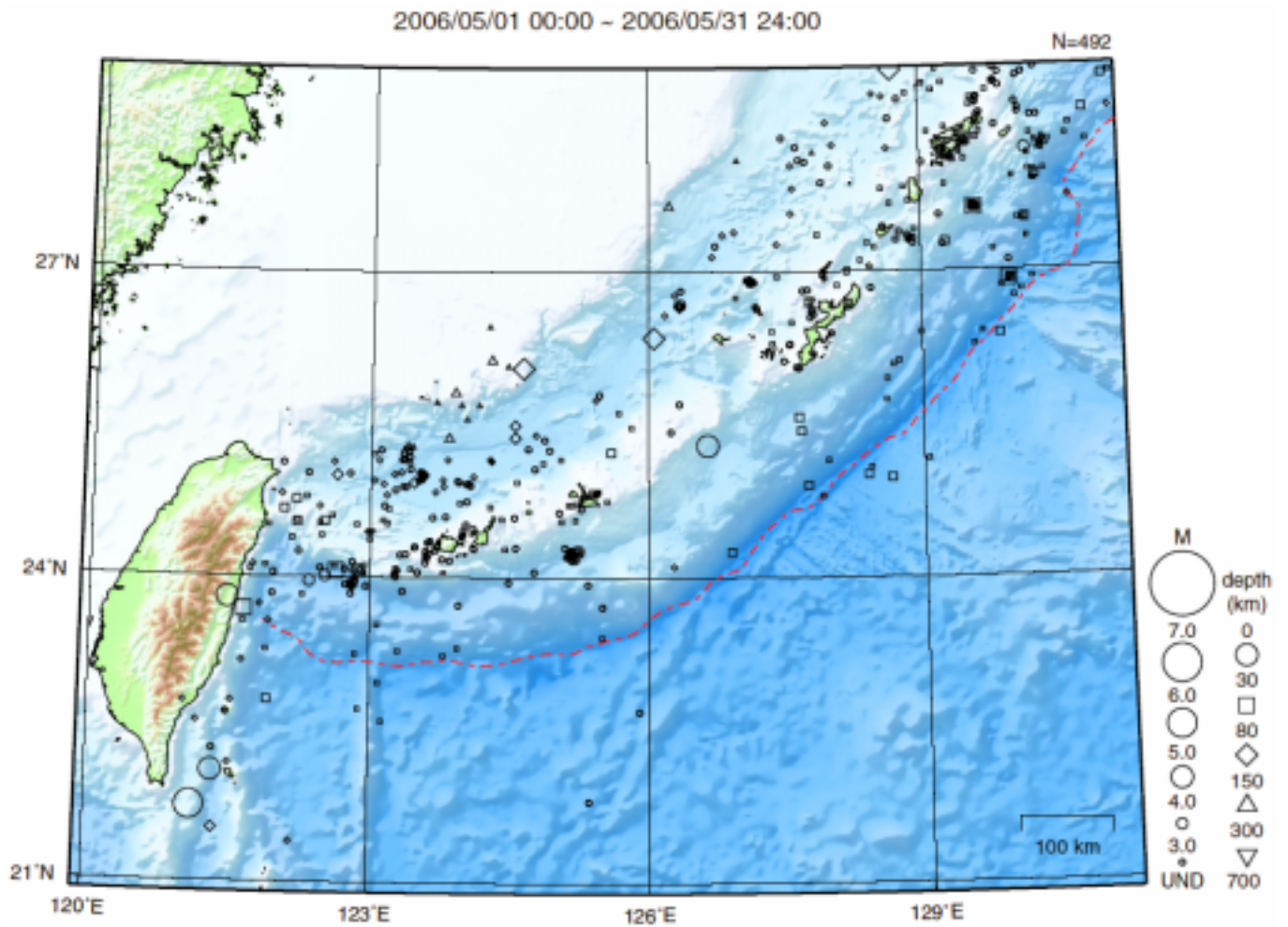


1923年8月以降の活動をみると、今回の地震の震央付近では、M4.0を超える地震が時々発生しているが、1944年6月7日のM6.0の地震以降、M6クラスの地震は発生していない。（[B]）



M5.0以上を濃くプロットし、M6.0以上および今回の地震に吹き出しを付けた

沖縄地方



使用した地形データは日本海洋データセンターの J-EGG500、米国地質調査所の GTOPO30、及び米国国立地球物理データセンターの ETOP02

特に目立った活動はなかった。

[上述の地震はM6.0 以上、陸域でM4.0 以上かつ最大震度 3 以上、海域でM5.0 以上かつ最大震度 3 以上のいずれかに該当する地震。]

● 東海地震の想定震源域及びその周辺の地震活動

[概況]

伊豆半島東方沖で4月17日ごろから地震活動が活発であったが、5月上旬ごろには低調となった。フィリピン海プレート内の地震活動は、浜名湖付近で低調な状態が継続しているほか、固着域でも低調となった。また固着域では、中規模以上の地震活動が低調な状態が2001年後半ごろから続いている。

[地震防災対策強化地域判定会委員打合せ会検討結果]

5月29日に気象庁において第241回地震防災対策強化地域判定会委員打合せ会(定例会)を開催し、気象庁は「最近の東海地域とその周辺の地震・地殻活動」として次のコメントを発表した(図2~4)。

現在のところ、東海地震に直ちに結びつくような変化は観測されていません。

全般的には顕著な地震活動はありません。浜名湖東方から静岡県中部の直下では通常より活動レベルの低い状態になっていますが、その他の地域では概ね平常レベルです。

東海地域及びその周辺における、プレート境界のゆっくり滑りに起因すると思われる長期的な地殻変動は、最近では停滞しているように見えます。

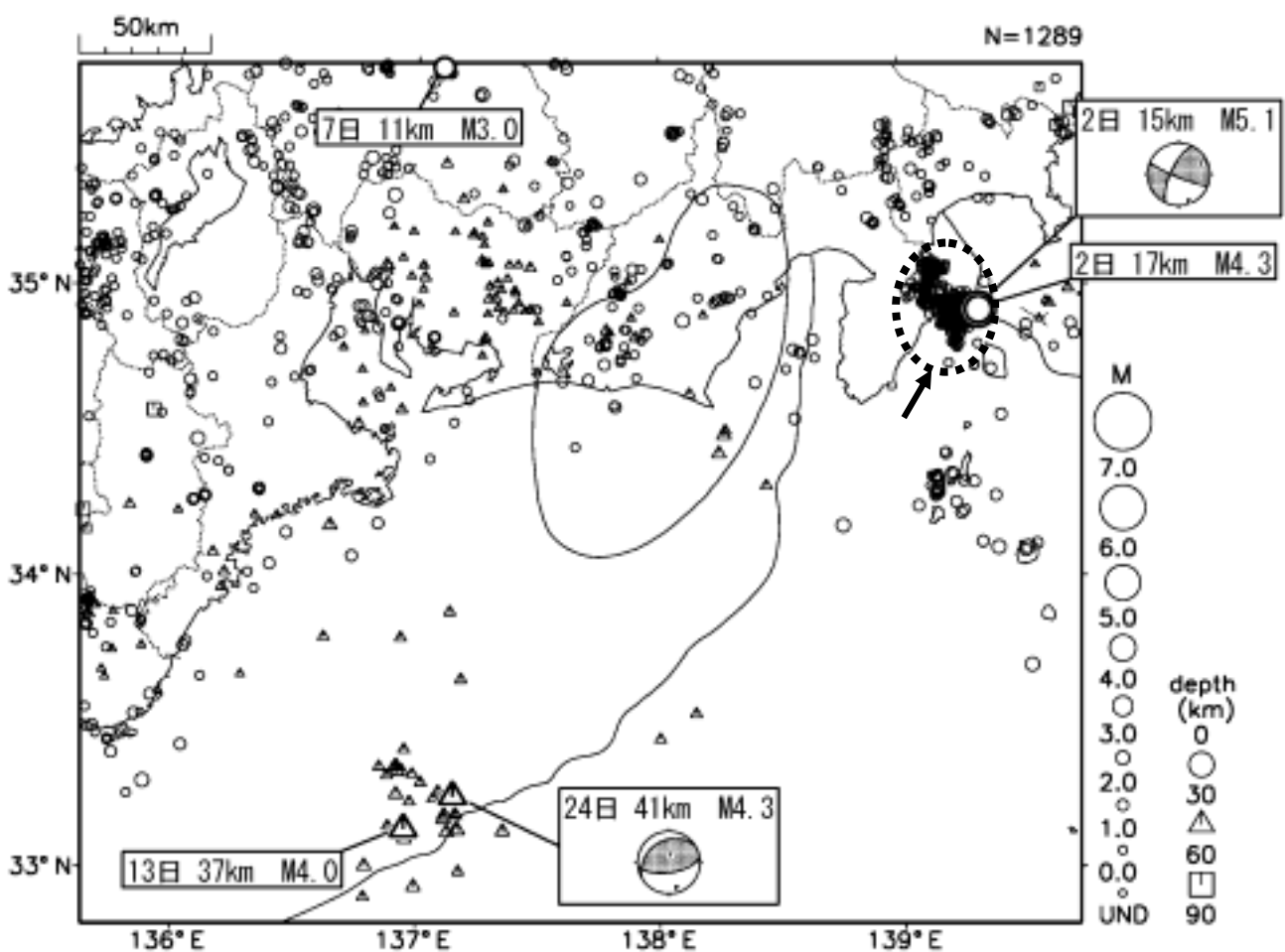


図1 震央分布図(2006年5月1日~31日:深さ90km以浅、Mすべて。M3.0以上の地震(東海道沖はM4.0以上)に「日、深さ、M」を付けた。すぐ下の図はP波初動による発震機構(下半球投影)。図中のなすび型の領域は東海地震の想定震源域。)

2日18時24分、伊豆半島東方沖の深さ15kmでM5.1の地震があり、最大震度4を観測した。この地震の発震機構は東北東-西南西方向に張力軸を持つ横ずれ断層型であった。
2日18時26分、伊豆半島東方沖の深さ17km

でM4.3の地震があり、最大震度2を観測した。4月17日頃から活発であった伊豆半島東方沖の地震活動は、5月上旬ごろには低調となった。
7日19時22分、岐阜県美濃中西部の深さ11km

で M3.0 の地震があり、最大震度 1 を観測した。
陸域の地殻内で発生した地震である。
13 日 16 時 24 分、紀伊半島沖の深さ 37km で
M4.0 の地震が発生した。
24 日 05 時 46 分、東海道沖の深さ 41km で M4.3
の地震が発生した。この地震の発震機構は北
北西 - 南南東方向に圧力軸を持つ逆断層型で

あった。

注：本文中の番号は、図 1 中の数字に対応する。

[東海地域の地震活動の頁で使われる用語]

・「固着域」(概況，図 2)と「想定震源域」(図 1)

東海地震発生時には、「固着域」(プレート間が強く「くっついている」と考えられている領域)あるいはその周辺の一部からゆっくりしたずれ(前兆すべり)が始まり、最終的には「想定震源域」全体が破壊すると考えられている。

・「クラスタ除去」(図 2，3，4)

地震は時間空間的に群(クラスタ: cluster)をなして起きることが多くある。「本震とその後に起きる余震」、「群発地震」などが典型的な群(クラスタ)で、余震活動等の影響を取り除いて地震活動全体の推移を見ることを「クラスタ除去」と言う。震央距離が 3 km 以内、発生時間差が 7 日以内の地震をクラスタと見なし、最大地震で代表させている。

・東海地域の地震活動

大規模な地震から国民の生命・財産を保護することを目的として、昭和 53 年(1978 年)12 月に施行された「大規模地震対策特別措置法」では、大規模な地震の発生のおそれがあり、その地震によって大きな被害が予想されるような地域をあらかじめ「地震防災対策強化地域」(以下、「強化地域」という。)として指定し、地震予知のための観測施設の整備を強化し、あらかじめ地震防災に関する計画をたてる等、各種の措置を講じることとしている。強化地域は平成 14 年(2002 年)4 月に見直しが行われ、現在、静岡県全域と東京都、神奈川・山梨・長野・岐阜・愛知及び三重の各県にまたがる 174 市町村(平成 18 年 4 月現在)が強化地域に指定されている。強化地域では、マグニチュード 8 クラスと想定されている大地震(東海地震)が起こった場合、震度 6 弱以上(一部地域では震度 5 強程度)になり、沿岸では大津波の来襲が予想されている。気象庁では東海地震の直前の前兆現象を捕らえるため、地震、地殻変動等の観測データを常時監視している。

東海地域の地震活動指数 (クラスタを除いた地震回数による)

2006年5月24日 現在

	① 固着域		② 愛知県		③ 浜名湖			④ 駿河湾
	地殻内	フィリ ピン海 プレート	地殻内	フィリ ピン海 プレート	フィリピン海プレート内			全域
					西側	全域	東側	
短期活動指数	5	1	5	2	4	1	1	5
短期地震回数 (平均)	8 (6.18)	1 (5.83)	6 (4.40)	7 (12.65)	1 (2.38)	1 (6.08)	0 (3.70)	7 (6.11)
中期活動指数	6	4	8	2	2	0	0	4
中期地震回数 (平均)	24 (18.53)	15 (17.50)	24 (13.21)	31 (37.95)	2 (4.76)	3 (12.15)	1 (7.39)	13 (12.22)

* Mしきい値：

M $\geq$ 1.1：固着域、愛知県、浜名湖、M $\geq$ 1.4：駿河湾

* クラスタ除去：

震央距離が Δr 以内、発生時間差が Δt 以内の地震をグループ化し、最大地震で代表させる。

$\Delta r=3\text{km}$ 、 $\Delta t=7\text{日}$ ：固着域、愛知県、浜名湖

$\Delta r=10\text{km}$ 、 $\Delta t=10\text{日}$ ：駿河湾

* 対象期間：

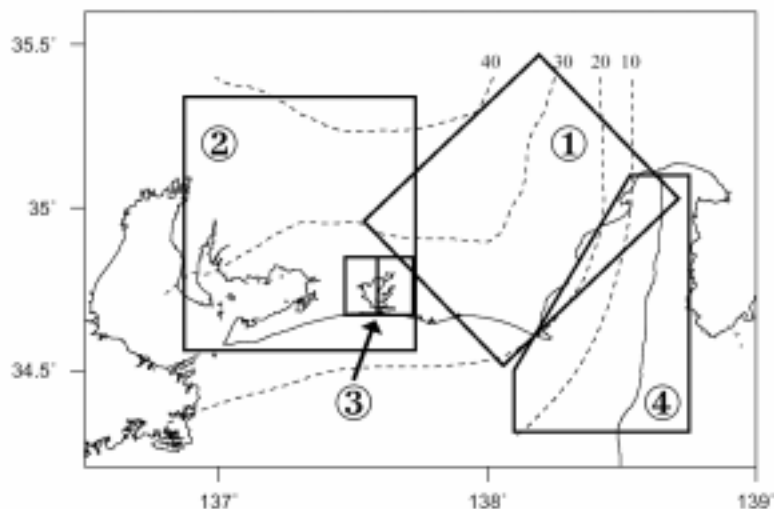
短期：30日間（固着域、愛知県）、90日間（浜名湖、駿河湾）

中期：90日間（固着域、愛知県）、180日間（浜名湖、駿河湾）

* 基準期間：

1997年－2001年（5年間）：固着域、愛知県、1998年－2000年（3年間）：浜名湖

1991年－2000年（10年間）：駿河湾



* プレート境界の等深線を波線で示す。

地震回数の指数化

指数	確率 (%)	地震数
8	1	多
7	4	↑
6	10	
5	15	
4	40	平常
3	15	↓
2	10	
1	4	
0	1	少

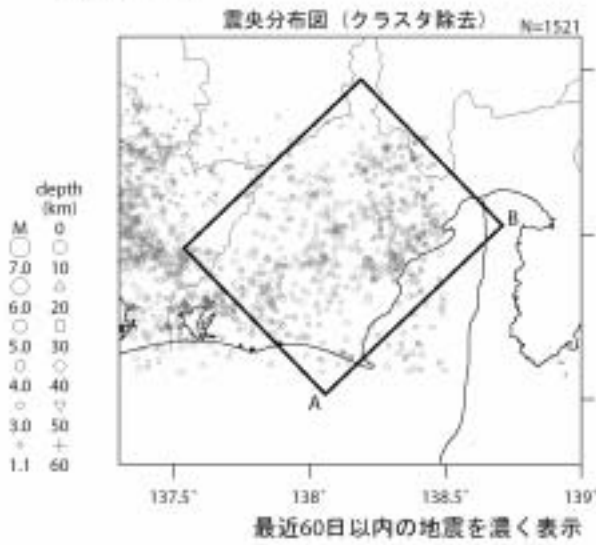
図2 東海地域の地震活動指数

浜名湖全域および東側は、活動指数の低い状態が続いている。愛知県の地殻内は、中期の活動指数はまだ高いが、短期は平常になった。固着域のフィリピン海プレート内は、短期の活動指数がやや低くなった。それ以外の地域は平常の活動であった。

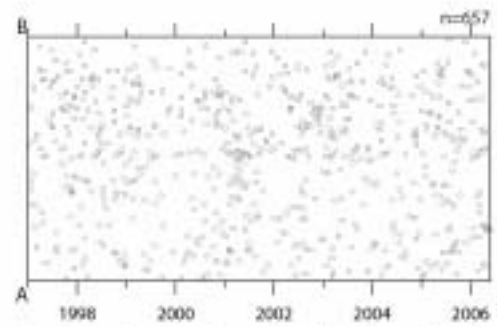
固着域（フィリピン海プレート内）

1997/ 1/ 1~2006/ 5/24

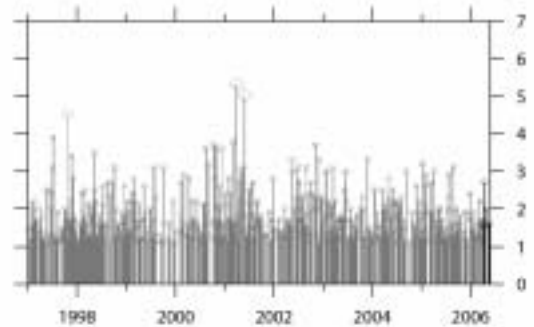
[M1.1以上]



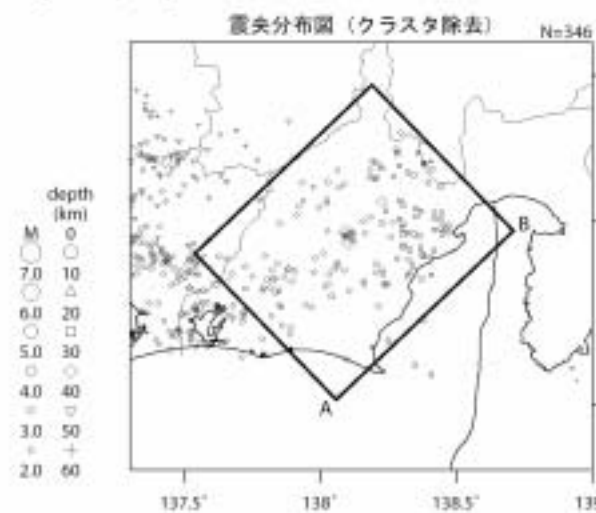
時空間分布図（A B方向）



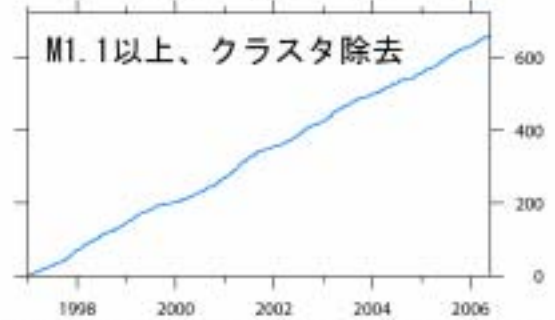
地震活動経過図（規模別）



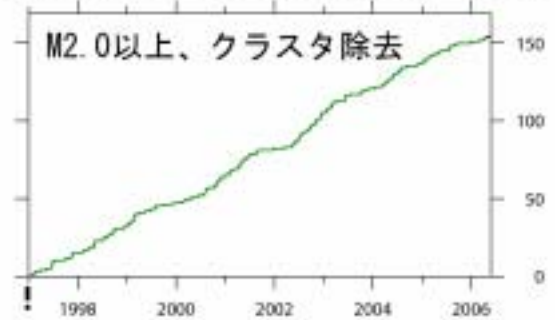
[M2.0以上]



地震回数積算図



地震回数積算図



[M3.5以上]

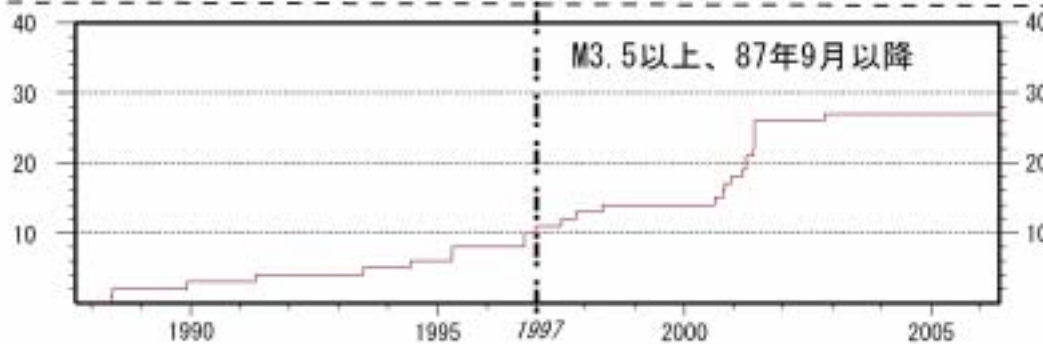


図3 固着域のフィリピン海プレート内の地震活動

2001年後半ごろから M3.5 以上の地震発生回数が少ない状態が続いている。M3.5 以下の地震発生回数には、時々揺らぎはあるものの大きな変化はない。

浜名湖（フィリピン海プレート内）

1995/ 1/ 1~2006/ 5/24 M $\geq$ 1.1 *クラスタ除去したデータ

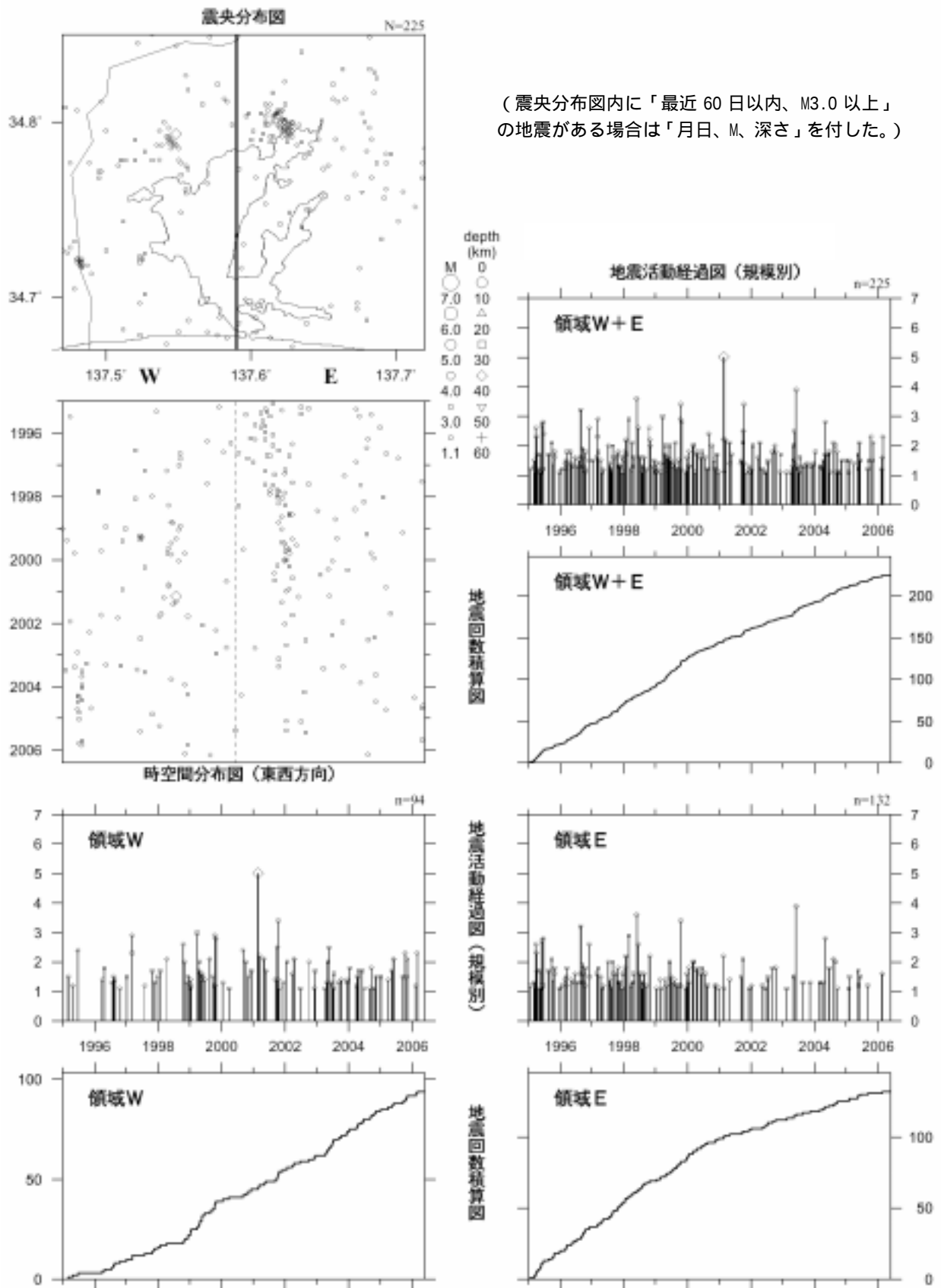


図4 浜名湖付近のフィリピン海プレート内の地震活動

領域Eでは2000年終わりごろからの活動の低下が継続している。

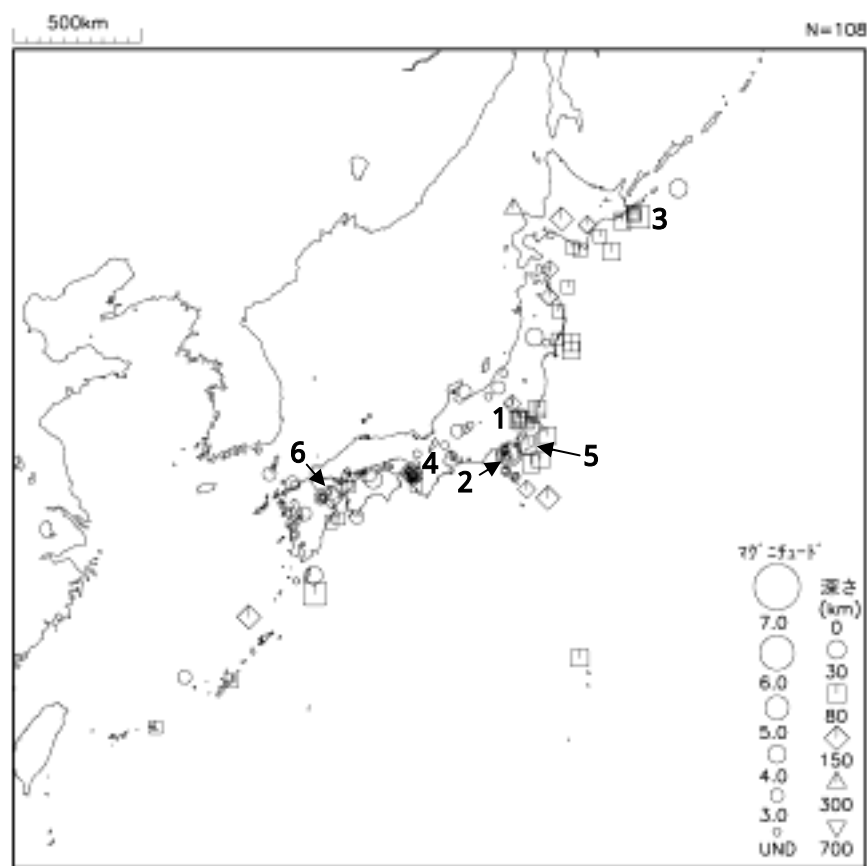


図 1 2006 年 5 月に震度 1 以上を観測した地震
(図中の番号は、表の No に対応する地震)

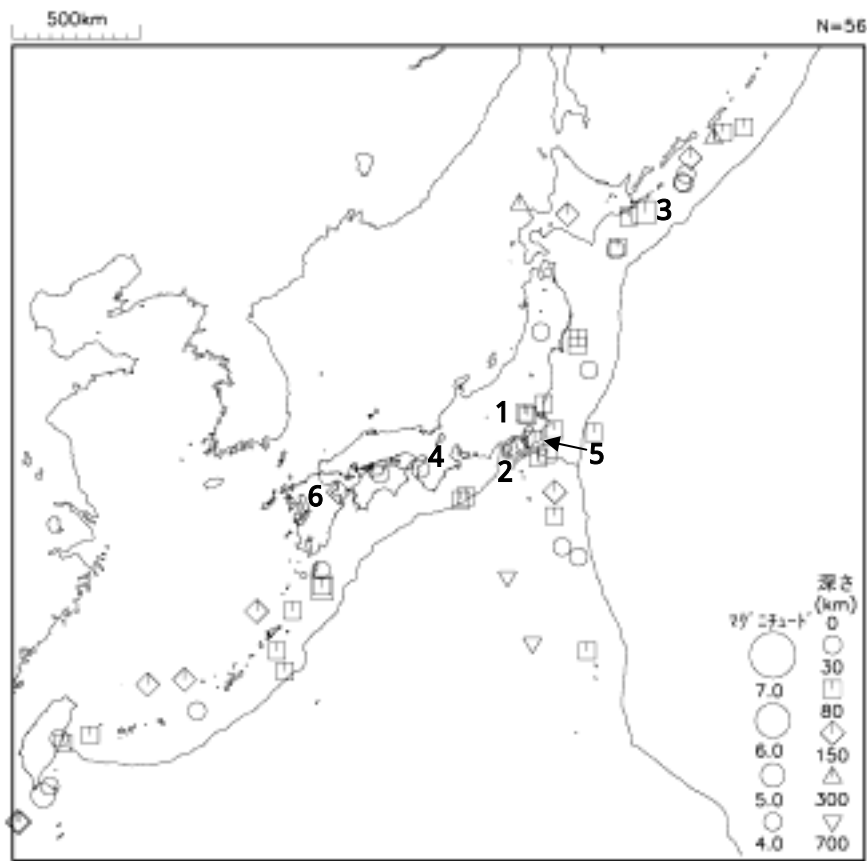


図 2 2006 年 5 月に発生した M4.0 以上の地震
(図中の番号は、表の No に対応する地震)

総数：9,628

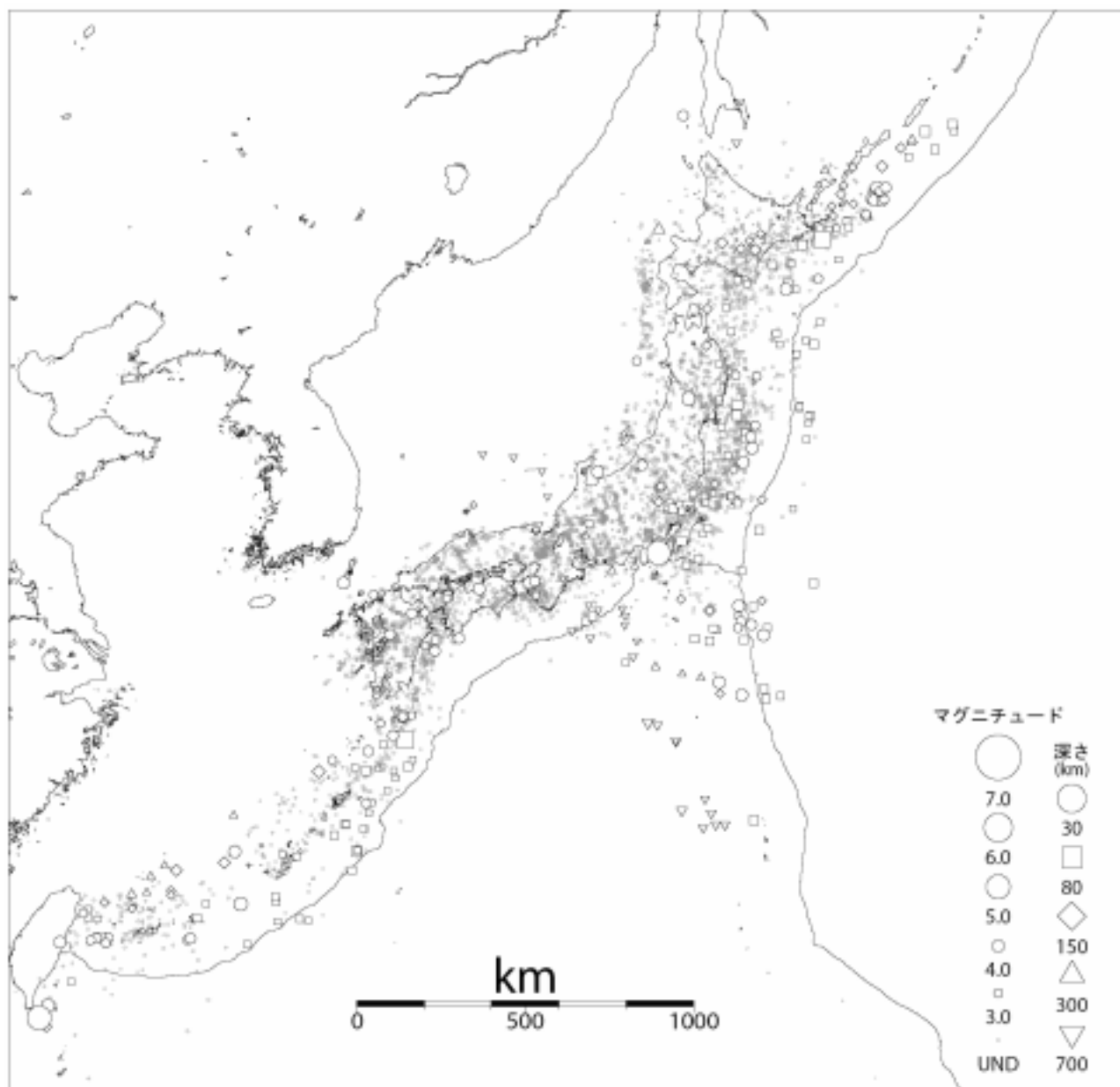


図3 気象庁が震源を決定した日本付近の2006年5月の地震の震央分布
(M3.0以上の地震については白抜きで示す)

● 表 1 . 過去 1 年間に震度 1 以上を観測した地震の最大震度別の月別回数
 < 平成 17 年 (2005 年) 5 月 ~ 平成 18 年 (2006 年) 5 月 >

	1	2	3	4	5弱	5強	6弱	6強	7	計	記事
2006年 5 月	81	20	6	2						109	
2006年 4 月	89	47	22	3	1					162	30日 伊豆半島東方沖 (震度 5 弱)
2006年 3 月	66	31	11		1					109	27日 日向灘 (震度 5 弱)
2006年 2 月	44	30	3	4						81	
2006年 1 月	61	20	4	1						86	
2005年12月	58	28	10	3						99	
2005年11月	47	23	8	2						80	
2005年10月	57	24	7	2	1					91	19日 茨城県沖 (震度 5 弱)
2005年 9 月	59	27	5	1						92	
2005年 8 月	89	29	8	1		1	1			129	16日 宮城県沖(震度 6 弱 : 1 回、 震度 2 : 3 回、震度 1 : 11回) 21日 新潟県中越地方 (震度 5 強)
2005年 7 月	81	31	11	4		1				128	23日 千葉県北西部(震度 5 強)
2005年 6 月	81	44	8	3	2					138	3日 熊本県天草芦北地方(震度 5 弱) 20日 新潟県中越地方(震度 5 弱) 福岡県西方沖の地震の余震 (震度 2 : 3 回、震度 1 : 14回)
2005年 5 月	82	34	13	5						134	福岡県西方沖の地震の余震 (震度 4 : 1 回、震度 2 : 7 回、 震度 1 : 15回)
2006年計	341	148	46	10	2					547	(平成18年 1 月 ~ 平成18年 5 月)
過去 1 年計	813	354	103	26	5	2	1			1304	(平成17年 6 月 ~ 平成18年 5 月)

注) 「記事」欄の「*」は関連の地震で震度 1 以上を観測した地震の回数。「記事」欄には主に震度 5 弱以上を観測した地震、または震度 1 以上を 10 回以上観測した地震活動について記載した。

地方公共団体等の震度計による震度の発表開始年月日。

平成 9 (1997) 年 11 月 10 日 秋田県、埼玉県、横浜市 (神奈川県)、新潟県、愛知県、大阪府、奈良県、和歌山県、岡山県、山口県

平成 10 (1998) 年 6 月 15 日 群馬県、福井県、静岡県、三重県、島根県、愛媛県

10 月 15 日 青森県、山形県、茨城県、石川県、京都府、兵庫県、鳥取県、広島県、徳島県、熊本県、宮崎県、鹿児島県

平成 11 (1999) 年 7 月 21 日 東京都、長野県

平成 12 (2000) 年 1 月 12 日 栃木県、千葉県、岐阜県、名古屋市 (愛知県)

3 月 28 日 滋賀県

7 月 18 日 富山県、香川県、大分県

平成 13 (2001) 年 3 月 22 日 佐賀県 5 月 10 日 山梨県、川崎市 (神奈川県)

7 月 19 日 高知県 12 月 12 日 福島県

平成 14 (2002) 年 3 月 20 日 岩手県、宮城県、神奈川県、福岡県、仙台市 (宮城県)

7 月 29 日 北海道、長崎県

平成 15 (2003) 年 3 月 10 日 沖縄県

平成 16 (2004) 年 5 月 26 日 独立行政法人防災科学技術研究所

● 表 2 . 日本及びその周辺におけるマグニチュード (M)別の月別地震回数
 <平成 17 年 (2005 年) 5 月～平成 18 年 (2006 年) 5 月>

	M3.0 ～ M3.9	M4.0 ～ M4.9	M5.0 ～ M5.9	M6.0 ～ M6.9	M7.0 以上	計 M3.0以上	計 M4.0以上	記事
2006年 5 月	242	52	4			298	56	
2006年 4 月	271	91	13	2		377	106	1 日：台湾付近 (M6.4) 16 日：台湾付近 (M6.0)
2006年 3 月	285	66	9	1		361	76	28 日：東海道沖 (M6.0)
2006年 2 月	252	66	6	2		326	74	15 日：マリアナ諸島近海 (M6.6) 17 日：父島近海 (M6.0)
2006年 1 月	265	52	5			322	57	
2005年12月	363	81	11	3		458	95	2 日：宮城県沖 (M6.6) 4 日：奄美大島近海 (M6.1) 奄美大島近海の地震の余震 (M3.0～3.9：45回、M4.0～4.9：7回、 M5.0～5.9：3回) 17 日：宮城県沖 (M6.1) 三陸沖の地震の余震 (M3.0～3.9：64回、M4.0～4.9：4回)
2005年11月	537	93	8	1	1	640	103	15 日：三陸沖 (M7.2) 三陸沖の地震の余震 (M3.0～3.9：277回、M4.0～4.9：27回) 22 日：種子島近海 (M6.0)
2005年10月	309	67	8	4		388	79	15 日：千島列島東方 (M6.4) 16 日：与那国島近海 (M6.5) 19 日：茨城県沖 (M6.3) 23 日：日本海中部 (M6.1)
2005年 9 月	294	65	6	2		367	73	6 日：台湾付近 (M6.0) 21 日：国後島付近 (M6.0)
2005年 8 月	453	92	10	2	1	558	105	16 日：宮城県沖 (M7.2) (M3.0～3.9：38回、M4.0～4.9：10回、 M5.0以上は本震の 1 回) 三陸沖の地震活動 (M3.0～3.9：43回、M4.0～4.9：13回、 M5.0～5.9：2回、M6.0～6.9：2回) 八丈島東方沖の地震活動 (M3.0～3.9：94回、M4.0～4.9：7回、 M5.0～5.9：1回)
2005年 7 月	378	98	15	1		492	114	23 日：千葉県北西部 (M6.0) 八丈島東方沖の地震活動 (M3.0～3.9：124回、M4.0～4.9：40回、 M5.0～5.9：6回)
2005年 6 月	271	75	9			355	84	
2005年 5 月	271	64	12			347	76	福岡県西方沖の地震の余震 (M3.0～3.9：10回、M5.0～5.9：1回)
2006年計	1315	327	37	5		1684	369	(平成18年 1 月～平成18年 5 月)
過去 1 年計	3920	898	104	18	2	4942	1022	(平成17年 6 月～平成18年 5 月)

注)日本及びその周辺：原則、北緯20～49度、東経120～153度の範囲。「記事」欄には主にM6.0以上の地震について記載した。

●世界の主な地震

5月に世界で発生したマグニチュード(M)6.0以上または被害を伴った地震の震央分布を図1に示す。また、その震源要素等を表1に示す。

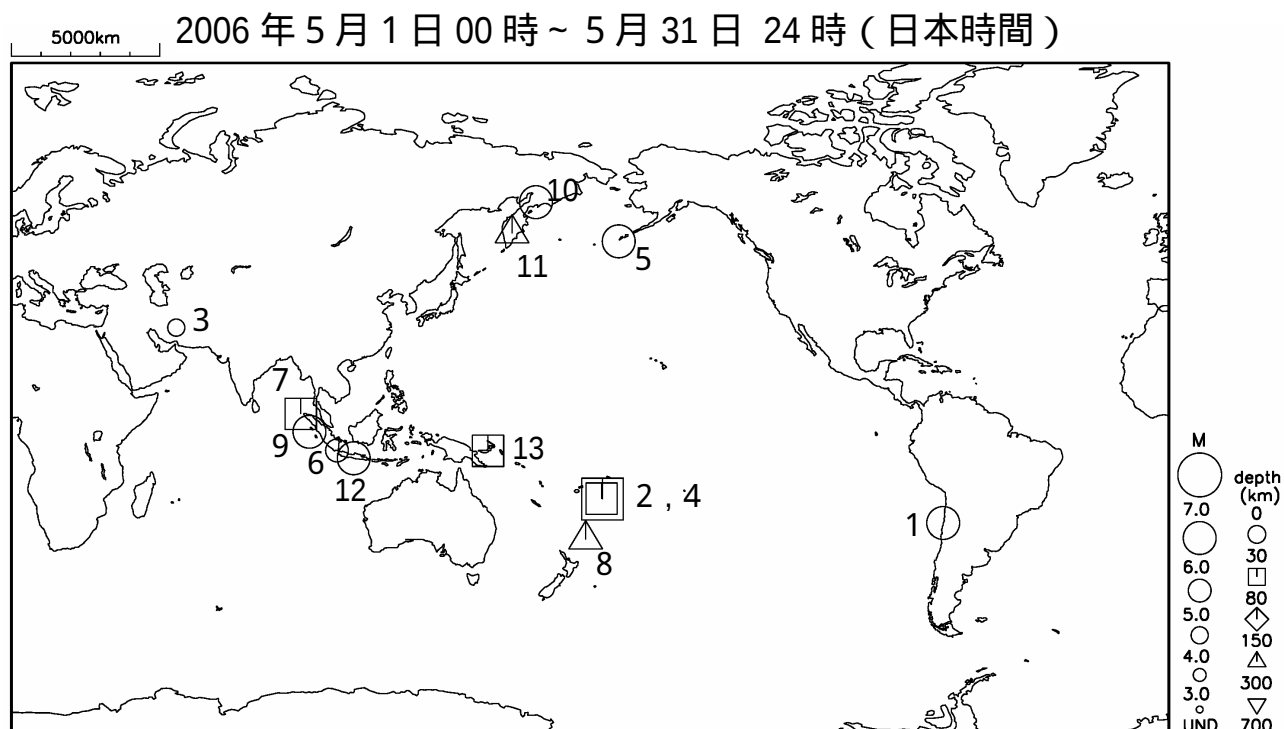


図1 2006年5月に世界で発生したM6.0以上または被害を伴った地震の震央分布
 <震源要素は米国地質調査所(USGS)発表のQUICK EPICENTER DETERMINATIONS(QED)による>

* : 数字は、表1の番号に対応する。

** : マグニチュードはmb(実体波マグニチュード)、Ms(表面波マグニチュード)のいずれか大きい値を用いて表示している。
 ただし12番のインドネシア、ジャワ島の地震はMw(モーメントマグニチュード)で表示している。

表1 2006年5月に世界で発生したマグニチュード6.0以上または被害を伴った地震の震源要素等

番号	月 日 時 分	緯度	経度	深さ (km)	mb	Ms	Mw	震央地名	備考 (被害状況など)
1	05月01日04時17分	S27° 00.2'W	70° 57.3'	27	6.0	6.4	6.7	チリ北部沿岸付近	
2	05月04日00時26分	S20° 06.7'W	174° 09.5'	55*	7.2	7.8	7.9	トンガ諸島	負傷者1名、建物被害 津波発生
3	05月07日15時20分	N30° 47.4'E	56° 42.0'	14*	4.7	3.9		イラン北部	負傷者70名、建物被害
4	05月08日00時21分	S19° 58.2'W	174° 26.4'	35*	5.1	6.0		トンガ諸島	
5	05月10日11時42分	N52° 30.5'W	169° 15.2'	18*	6.1	6.2	6.3	アリューシャン列島 フォックスアイランド	
6	05月12日17時16分	S 5° 35.6'E	105° 23.5'	18	5.4	4.8	5.5	スンダ海峡	建物被害
7	05月13日12時11分	N 5° 31.3'E	94° 25.3'	43	6.0	5.1	5.6	インドネシア、スマトラ北部	
8	05月16日19時39分	S31° 35.7'W	179° 15.6'	152	6.7		7.4	ケルマデック諸島付近	
9	05月17日00時28分	N 0° 06.0'E	97° 03.1'	12*	6.5	6.8	6.8	インドネシア、スマトラ北部	
10	05月22日20時12分	N60° 48.9'E	165° 40.9'	17	6.0	6.7	6.5	ロシア、東シベリア	
11	05月22日22時08分	N54° 16.2'E	158° 26.2'	183	6.1		6.2	カムチャツカ	
12	05月27日07時53分	S 7° 57.7'E	110° 27.4'	10*			6.3	インドネシア、ジャワ島	死者6200名以上、負傷者1800名以上 建物被害多数(注)
13	05月28日12時12分	S 5° 41.4'E	151° 09.4'	34*	5.9	6.6	6.4	バブアニューギニア ニューアイルランド	NWPTA発表

・震源要素、被害状況等は米国地質調査所(USGS)発表のQUICK EPICENTER DETERMINATIONS(QED)による(2006年6月6日現在)。ただし、日本付近で発生した地震については震源要素及びマグニチュード(Msの欄に括弧を付して記載)は気象庁、被害状況は総務省消防庁による。

・(注)報道によると、その後死者約5800名に下方修正されたとの情報がある。

・時分は震源時で日本時間[日本時間=協定世界時+9時間]である。

・MwはUSGSのモーメントマグニチュードである。

・震源の深さに「*」が付いているのは、USGSが推定した深さである。

・NWPTAは、気象庁が北西太平洋域に提供している北西太平洋津波情報である。(地震・火山月報(防災編)2005年5月号参照)。

5月4日 トンガ付近の地震

5月4日00時26分頃(日本時間) トンガ付近でマグニチュード7.8(米国地質調査所[以下、USGS]によるマグニチュード)の地震が発生した。この地震によりトンガの首都ヌクアロファで負傷者1名の被害を生じた。

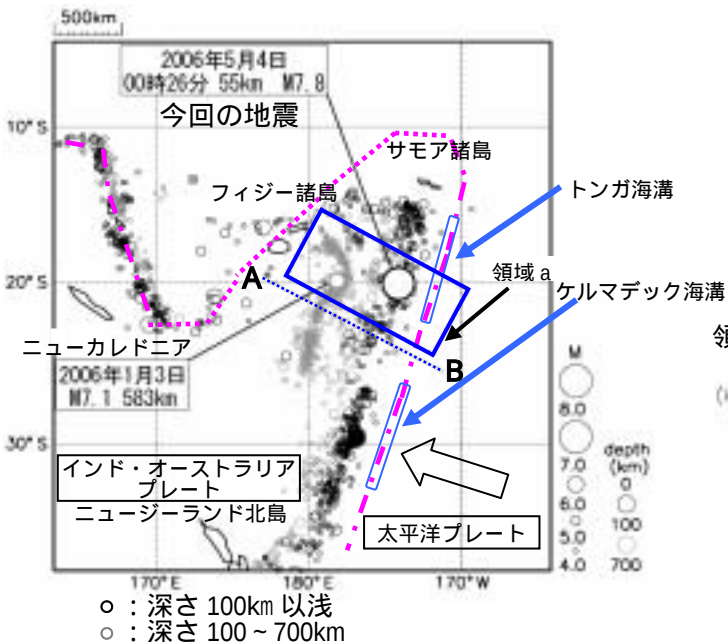
この付近は、太平洋プレートがトンガ - ケルマデック海溝からインド・オーストラリアプレートの下に沈み込んでいるところで地震活動の活発な地域であり、これまでもマグニチュード7を超える地震が時々発生している。今回の地震の発震機構は、西北西 - 東南東方向に圧力軸を持つ逆断層型で、太平洋プレートの沈み込みに伴い発生した地震と考えられる。

この地震について、気象庁は同日03時25分に「日本の沿岸では若干の海面変動があるかもしれませんが被害の心配はありません。」の「遠地地震の地震情報」(日本国内向け)を発表した。

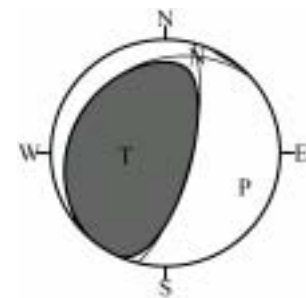
この地震に伴い、トンガのヌクアロファ、バヌアツのポートヴィラなどで0.2mの津波が観測されたほか、日本でも微弱な津波を観測した(津波については次頁「5月4日トンガ付近の地震(2)」を参照)。

震央分布図(2005年7月1日~2006年5月31日:
M 4.0、深さ700km以浅)

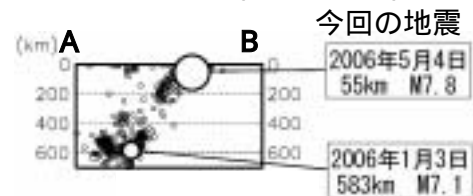
震源データはUSGSによる。破線はおおまかなプレート境界(点線は不明瞭な境界) 矢印は太平洋プレートのおよその進行方向を示す。



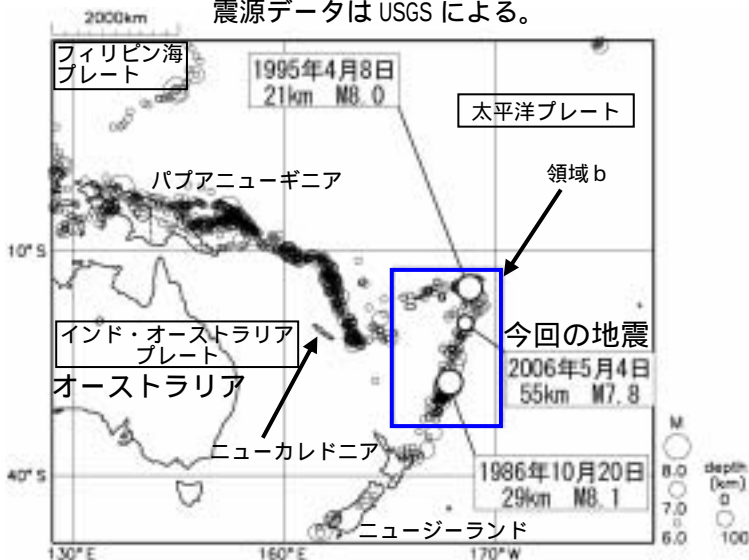
今回の地震の発震機構
(ハーバード大学によるCMT解)



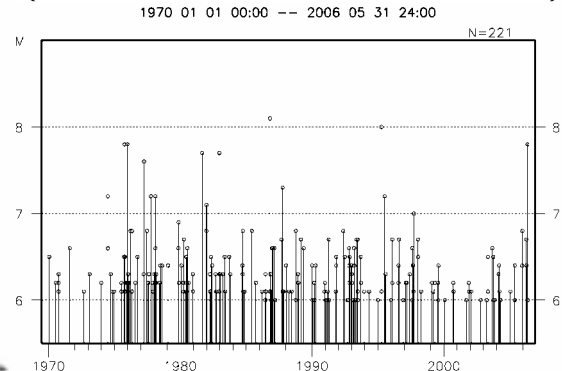
領域a内の断面図(A-B断面)



震央分布図(1970年1月1日~2006年5月31日:
M 6.0、深さ100km以浅)
震源データはUSGSによる。



領域b内のM-T図
(mbもしくはMsのいずれか大きな値で表示)



5月4日 トンガ付近の地震（2）

5月4日00時26分頃（日本時間）のトンガ付近の地震に伴い、トンガのヌクアロファ、バナアツのポートヴィラなどで0.2mの津波が観測された。また、東北地方太平洋沿岸と父島で微弱な津波を観測した。なお、日本で観測された津波は微弱で、津波の第一波及び最大の高さの値は決定できない。

1927年以降、トンガ付近の地震により日本で津波が観測された例は知られていない。

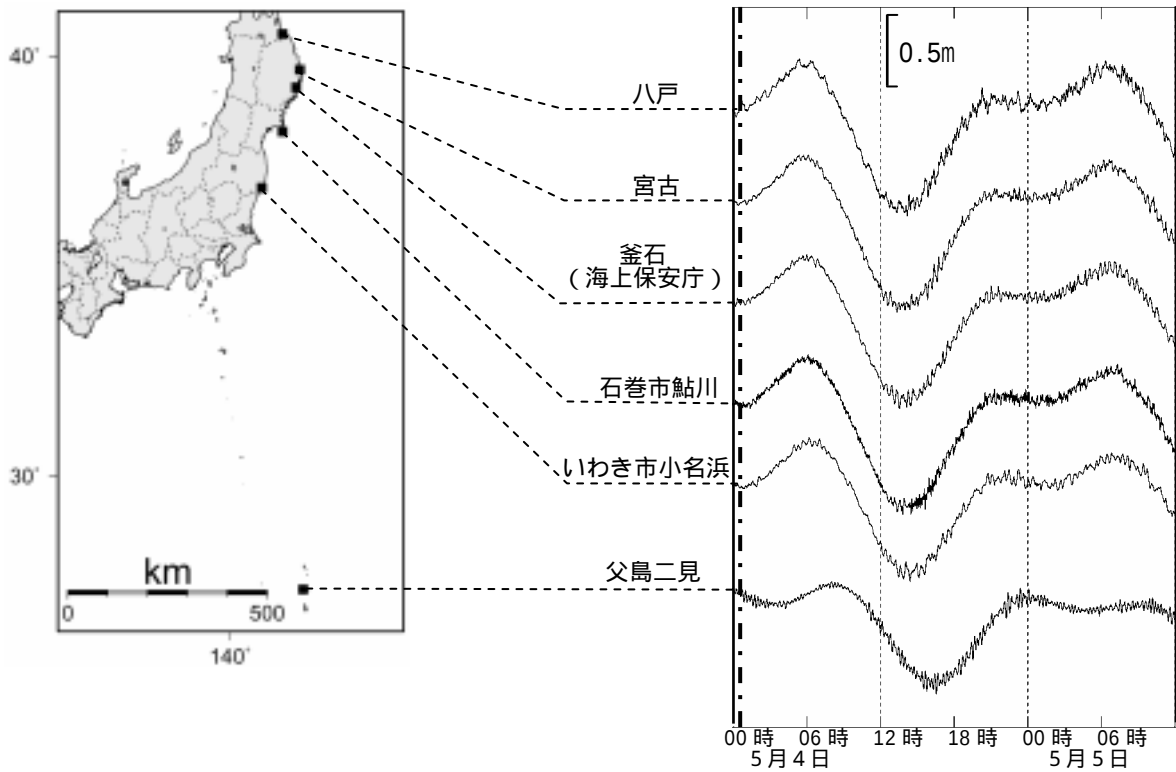


図1 津波が観測された国内の検潮所の位置（左図）と検潮所で観測した津波の波形（右図）
右図の一点鎖線は地震発生時刻を示す。なお、微弱な津波のため、第一波及び最大の高さの値は決定できない。

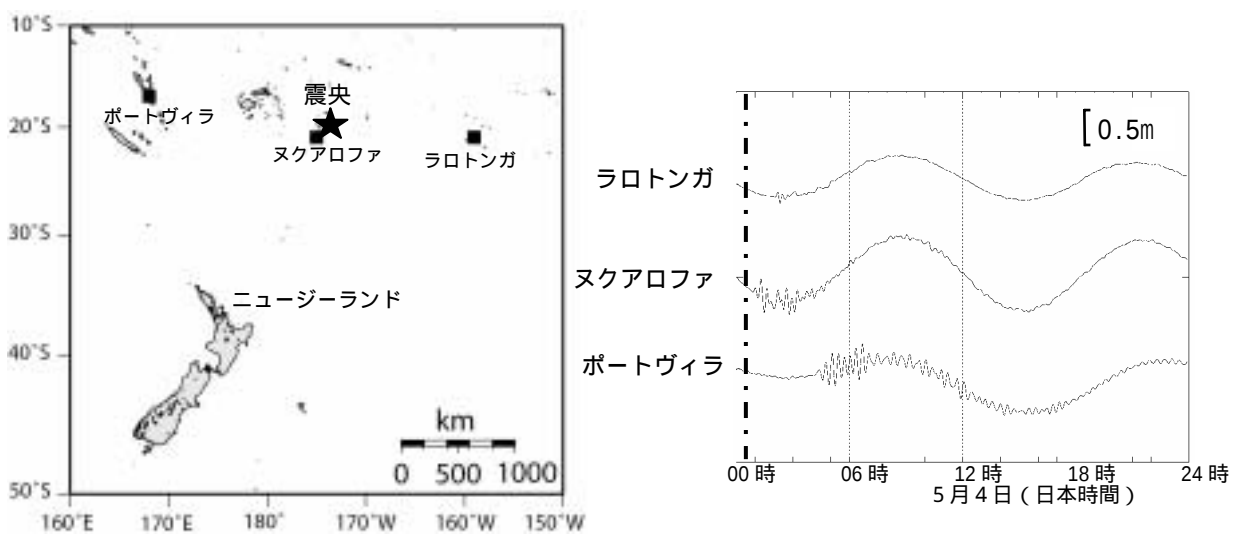


図2 津波が観測されたトンガ周辺の検潮所の位置（左図）と検潮所で観測した津波の波形（右図）
右図の一点鎖線は地震発生時刻（日本時間）を示す。

5月16日 ケルマデック諸島付近の地震

5月16日19時40分ころ（日本時間）ニュージーランドの北に位置する、ケルマデック諸島付近の深さ約150kmでマグニチュード7.4（米国地質調査所[以下、USGS]によるモーメントマグニチュード）の地震が発生した。

この地震について、気象庁は同日20時08分に「この地震による日本への津波の影響はありません。」の旨の遠地地震情報（国内向け）を発表した。

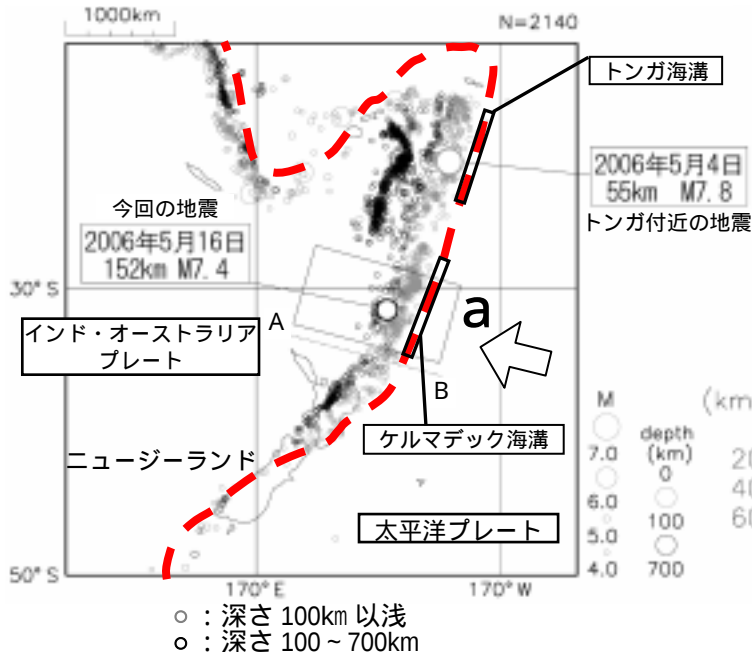
今回の地震の発震機構は、東西方向に張力軸を持つ型で、太平洋プレート内部で発生した地震と考えられる。

この付近では太平洋プレートが、トンガ - ケルマデック海溝からインド・オーストラリアプレートの下に高角度で沈みこんでおり、M7程度の地震が時々発生している。

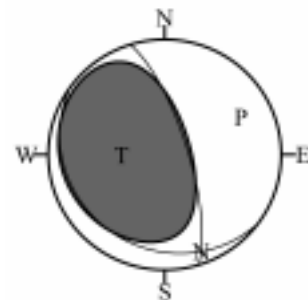
震央分布図（2005年7月1日～2006年5月31日：

M 4.0、深さ700km以浅）

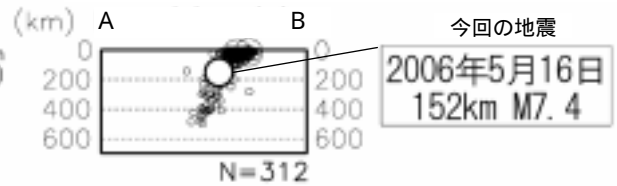
震源データはUSGSによる。破線はおおまかなプレート境界を示す。矢印は太平洋プレートのおおよその進行方向を示す。



今回の地震の発震機構
（ハーバード大学によるCMT解）



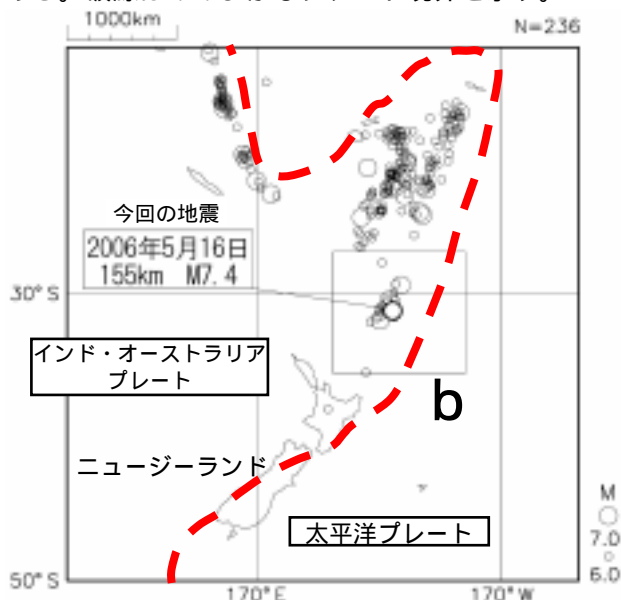
領域a内の断面図（A-B断面）



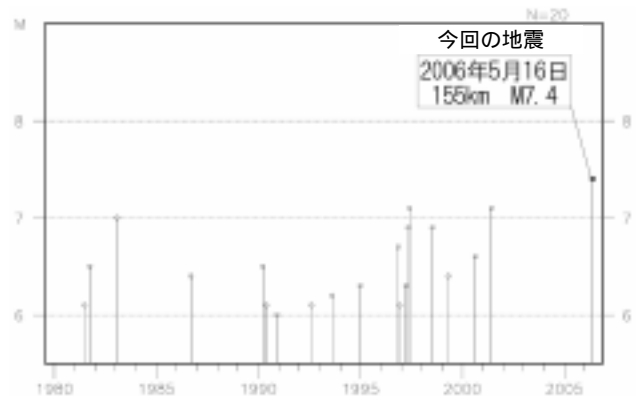
震央分布図（1980年1月1日～2006年5月31日：

M 6.0、深さ100～700km）

震源位置はハーバード大学によるCMT解のセントロイドの位置である。マグニチュードはモーメントマグニチュードである。破線はおおまかなプレート境界を示す。



領域b内のM - T図



5月27日 インドネシア（ジャワ島）の地震

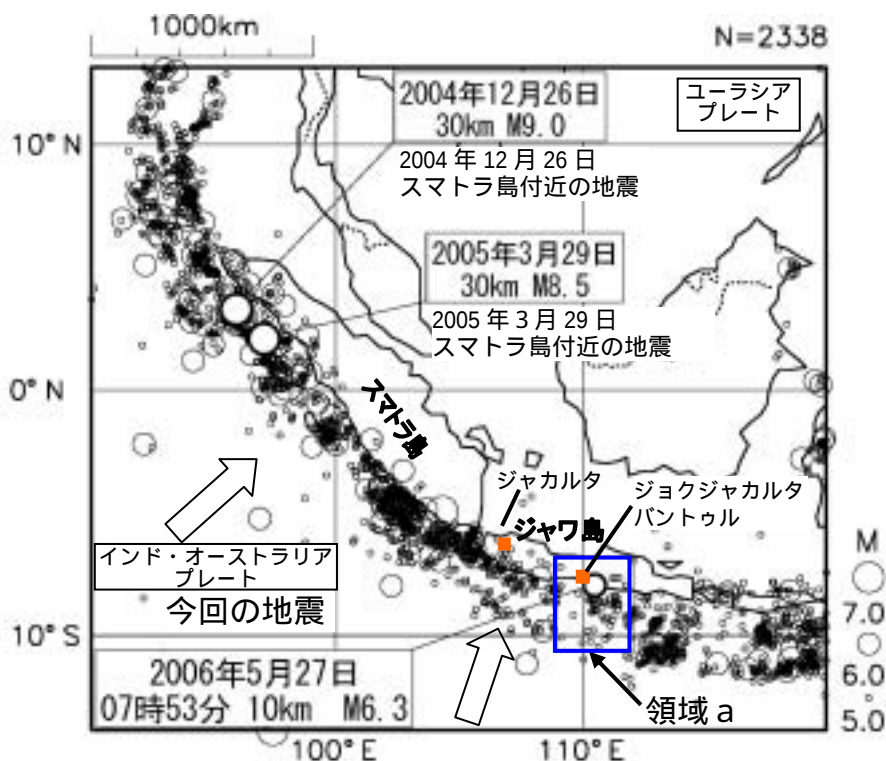
5月27日 07時54分頃（日本時間）インドネシアのジャワ島付近で、深さ 10km、マグニチュード 6.3（米国地質調査所[以下、USGS]によるモーメントマグニチュード）の地震が発生した。この地震により、ジャワ島中部のバントウルからジョクジャカルタにかけて死者の合計が 5,000 人を超えるなど甚大な被害が発生している（6月8日現在）。

今回の地震の発震機構は、南北方向に圧力軸を持つ横ずれ断層型で地殻内の地震と考えられる。

この付近は、南からインド・オーストラリアプレートが北のユーラシアプレートの下に沈みこんでいる領域である。1970 年以降の M5.0 以上の活動を見ると、ジャワ島の周辺では M 6 を超える地震は度々発生するなど地震活動の活発なところであるが、今回の地震の震源付近では M 6 を超える地震は発生していなかった。

震央分布図（1970 年 1 月 1 日～2006 年 5 月 31 日：M 5.0、深さ 100km 以浅）

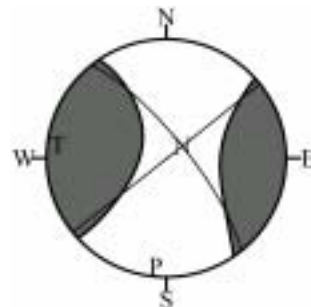
震源データは USGS による。白抜き矢印はインド・オーストラリアプレートのおおよその進行方向を示す。■は主な都市を示す。



領域 a 内の M - T 図
（mb もしくは Ms のいずれか大きな値で表示）



今回の地震の発震機構
（ハーバード大学による CMT 解）



平成 18 年 5 月の主な火山活動

記事を掲載した火山



注 1 本資料で示すレベルは、火山活動度レベルを導入した火山におけるレベルである。

注 2 記号の意味

- ▲：噴火した火山
 - ：活動が活発もしくはやや活発な状態にあった火山
 - ：その他記事を掲載した火山
- 等丸付き数字：火山活動度レベル

注 3 火山名に下線を引いた火山について、説明資料（火山活動解説資料）を配布。

【噴火した火山】**▲ 桜島 【比較的静穏な噴火活動（レベル 2）】**

1 日に爆発的噴火が発生したほか、ごく小規模な噴火等も発生したが、桜島としては比較的静穏な噴火活動が続いている。GPS による地殻変動観測では長期的な東西方向のわずかな伸びが続いている。

▲ 諏訪之瀬島 【活発な状況（レベル 3）】

今期間、爆発的噴火は観測されなかったが、13 日、14 日に小規模な噴火が発生した。十島村役場諏訪之瀬島出張所によれば、13 日、14 日に少量の火山灰を含む噴煙が確認された。

【活動が活発もしくはやや活発な状態であった火山】**● 雌阿寒岳 【活発な状況】**

ポンマチネシリ山頂の赤沼火口や北西側斜面での噴煙活動は 3 月 21 日の噴火直後に比べ低下傾向にあるものの、依然として活発な噴煙活動が続いており、噴煙の高さは火口縁上概ね 100～200m で推移した。5 月 9 日～10 日に一時的に火山性地震が多発し、火山性微動も観測されたが、地震活動は低調な状態が続いている。GPS による地殻変動観測では、特段の変化は観測されなかった。

● 十勝岳 【やや活発な状況】

62 - 2 火口は噴煙活動が活発で、高温の状態が続いていると推定される。

● 樺前山 【やや活発な状況】

A 火口及び B 噴気孔群の高温状態が続いている。

● 浅間山 【やや活発な状況（レベル 2）】

火山性地震および微動の発生回数ならびに火山ガスの放出量がやや多い状態が続いている。山頂火口内は高温状態が続いていると推定される。

● 三宅島 【やや活発な状況】

山頂火口の噴煙活動は引き続き活発で、二酸化硫黄の放出量も今期間に実施した観測では 1 日あたり概ね 900 ~ 1,700 トンの範囲で推移しており、依然として多い状態が続いている。

● **福岡ノ場** 【やや活発な状況】

海上自衛隊が 9 日に上空から行った観測で、火山活動によるとみられる変色水が確認された。

● **阿蘇山** 【やや活発な状況（レベル 2）】

中岳第一火口の熱活動はやや活発な状態となっている。中岳第一火口の湯だまりの量は約 7 割、表面温度は 70℃ 以上で推移しており、小規模な土砂噴出も観測した。

● **薩摩硫黄島** 【やや活発な状況（レベル 2）】

噴煙活動はやや活発な状態が続いている。

● **口永良部島** 【やや活発な状況（レベル 2）】

火山性地震はやや多い状態が続いている。

【火山活動度レベルを下げた火山】

霧島山（新燃岳） 【やや活発な状況（レベル 2）→ 静穏な状況（レベル 1）】

3 月下旬以降、火山性地震の日回数が 10 回以下と少なく、火山性微動も 2 月 23 日以降は観測されていない。火山活動は静穏な状態になっているため、火山活動度レベルを 22 日に 2（やや活発な火山活動）から 1（静穏な火山活動）に引き下げた。

霧島山（御鉢） 【やや活発な状況（レベル 2）→ 静穏な状況（レベル 1）】

3 月下旬以降は火口縁を超える噴気はほとんど観測されず、2 月 16 日以降は振幅のやや大きい火山性微動も観測されていない。また、火山性地震も少ない状況が続いている。火山活動は静穏な状態になっているため、火山活動度レベルを 22 日に 2（やや活発な火山活動）から 1（静穏な火山活動）に引き下げた。

【静穏な状況であった火山】

（北海道地方）

倶多楽、有珠山、北海道駒ヶ岳、恵山、渡島大島

（東北地方）

岩手山、秋田駒ヶ岳、吾妻山（レベル 1）、安達太良山、磐梯山

（関東・中部地方及び伊豆・小笠原諸島）

那須岳、草津白根山（レベル 1）、新潟焼山、御嶽山、白山、富士山、伊豆東部火山群、伊豆大島（レベル 1）、八丈島

（九州地方）

九重山（レベル 1）、雲仙岳（レベル 1）

（沖縄地方）

硫黄島

【平成 18 年 6 月（期間外）の主な火山活動】

▲ **桜島** 【比較的静穏な噴火活動（レベル 2）】

6 月 4 日昼前、桜島昭和火口^{（注）}付近（南岳東側斜面 8 合目付近）から噴煙高度 200m のごく小規模な噴火が発生した。その後も 5 日朝まで火山灰を含む有色噴煙が時々観測され、ごく小規模な噴火が断続的に発生していたと考えられる。噴火は一旦停止したが、6 日 10 時前後に噴煙高度 200m のごく小規模な噴火が発生し、7 日 17 時 30 分には噴煙高度 1000m の小規模な

噴火があり、その後もごく小規模な噴火が断続的に発生している。

今回の噴火活動は、従来の南岳山頂火口とは異なる場所から発生しており、4日以降現在まで小規模ながら噴火活動が続いている。今後の火山活動の推移に注意する必要がある。

（現在の火山活動度レベルは0～5のうち2（比較的静穏な噴火活動））

（注）昭和14年10月26日に南岳東側斜面（海拔750m付近）から小規模噴火が発生し、同月29日には小規模な火砕流も発生した。噴火はその後もしばしば繰り返され、昭和21年1月以降活発化して3月には南岳東側斜面（海拔800m付近）から溶岩を流出した。最後の噴火は昭和23年7月27日の小規模噴火。

過去1年間の火山活動の状況

火 山 名		平成18年											
		6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月
雌阿寒岳	活動									●	▲	●	●
十勝岳	活動	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
樽前山	活動	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
吾妻山	活動 レベル												
草津白根山	活動 レベル												
浅間山	活動 レベル	● →	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
伊豆大島	活動 レベル												
三宅島	活動	●	●	●	●	●	●	●	●	▲	●	●	●
福德岡ノ場	活動		▲		●	●	●	●	●	●	●	●	●
九重山	活動 レベル												
阿蘇山	活動 レベル	●	●	●	●	●	●	●	● →		● →	●	●
雲仙岳	活動 レベル												
霧島山（新燃岳）	活動 レベル									● →	●	●	→
霧島山（御鉢）	活動 レベル	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	→
桜島	活動 レベル	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲
薩摩硫黄島	活動 レベル	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
口永良部島	活動 レベル	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
諏訪之瀬島	活動 レベル	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲

活動状況（活動）

- ▲：噴火した火山
- ：活動が活発もしくはやや活発な状態であった火山

火山活動度レベル

- ：小規模な噴火が発生かその可能性
（吾妻山、草津白根山、浅間山、雲仙岳では「小～中規模噴火が発生かその可能性」）
- ：やや活発な火山活動
（桜島については、「比較的静穏な噴火活動」）
- ：静穏な火山活動

平成 18 年 5 月の火山情報発表状況

火 山 名	情報の種類及び号数	発表日時	概 要
雌阿寒岳	火山観測情報第 26 号	1 日 16:00	活発な火山活動が継続。4 月 24 日～5 月 1 日 15 時の活動状況（噴火はなし）。4 月 26 日に行った上空からの観測結果。
	火山観測情報第 27 号	8 日 16:00	活発な火山活動が継続。1 日～8 日（15 時）の活動状況（噴火はなし）。
	火山観測情報第 28 号	10 日 11:00	9 日から地震回数が一時増加。活発な火山活動が継続。
	火山観測情報第 29 号	15 日 16:00	活発な火山活動が継続。8 日～15 日（15 時）の活動状況（噴火はなし）。9 日～11 日の地震増加とその後の経過。
	火山観測情報第 30 号	22 日 16:00	活発な火山活動が継続。15 日～22 日（15 時）の活動状況（噴火はなし）。
	火山観測情報第 31 号	29 日 16:00	活発な火山活動が継続。22 日～29 日（15 時）の活動状況（噴火はなし）。
浅 間 山	火山観測情報第 18 号	8 日 16:00	4 月 28 日～5 月 8 日 15 時の活動状況。レベルは 2。
	火山観測情報第 19 号	12 日 16:00	8 日～12 日 15 時の活動状況。レベルは 2。
	火山観測情報第 20 号	19 日 16:00	12 日～19 日 15 時の活動状況。15 日に行ったガス観測の結果。レベルは 2。
	火山観測情報第 21 号	26 日 16:00	19 日～26 日 15 時の活動状況。レベルは 2。
三 宅 島	火山観測情報 第 121～151 号 （1 日 1 回発表）	1 日～31 日 16:30	最近の火山活動評価、前日 16 時～当日 16 時の活動状況及び上空の風の予想。
霧 島 山	火山観測情報第 6 号	22 日 15:00	新燃岳と御鉢の火山活動は静穏な状態になった。レベルを 2 から 1 に引き下げた。

● 世界の主な火山活動

平成 18 年（2006 年）5 月に噴火の報告された主な火山（日本を除く）は下図のとおりである。
このうち、顕著な活動が見られた主な火山は以下のとおりである。

メラピ火山（ジャワ島 インドネシア）（図中A）

4 月上旬から活発な火山活動が続いていたが、5 月に入り活動がさらに活発化し、13 日には溶岩ドームが崩壊し、ドーム崩壊型の火砕流が発生した。火砕流は 5 月中旬～下旬にかけて断続的に発生し、28 日～30 日に発生した火砕流は南東側には 3 km、南西には 4 km 流走した。

スフリエール・ヒル（西インド諸島モンセラット島、イギリス領）（図中B）

20 日朝、山頂部分の溶岩ドームが崩壊し、午前 7 時 40 分には噴煙が海拔約 17km まで達するとともに火砕流が発生した。この噴煙高度は最近 10 年間では最も高いものであった。噴火活動はその後収まったが、5 月下旬には新たな溶岩ドームが出現するなど、活発な火山活動が続いている。

（以上、米国スミソニアン自然史博物館の G V P（Global Volcanism Program）による。日付は全て現地時間。火山名の読み方は、原則として気象庁：「火山観測指針（参考編）」による。）

